

南森測量調査報告書

(古墳推定地に関する調査)

2017年3月

南陽市教育委員会

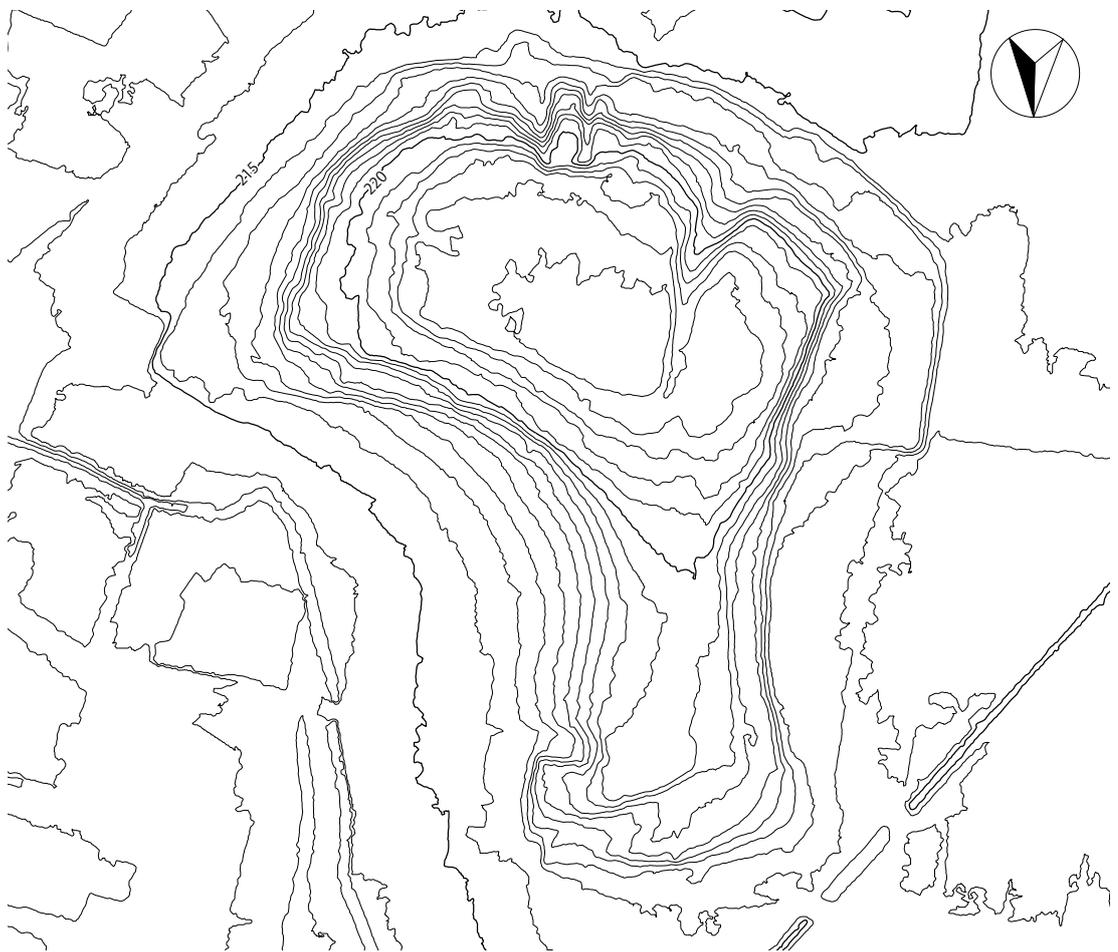
南森測量調査報告書

(古墳推定地に関する調査)

南陽市埋蔵文化財調査報告書第16集

平成29年3月

南陽市教育委員会



南森丘陵赤色立体地图・地形图 S= 1/1500 0 20m

序

この度、「南森測量調査報告書」を発行する運びとなりました。本書は、南陽市教育委員会が平成 28 年度に作成した測量図を元に、これまでの諸調査の成果をまとめたものです。

市内には国指定史跡稲荷森古墳があります。その南にある南森は地元では古くから前方後円墳ではないかと言われておりました。前方後円墳であれば、その大きさは東北のみならず東日本有数の規模であり、東北地方の歴史を考えるうえで非常に重要な古墳となります。

近年、この南森の周辺開発が急速に進み、このまま遺跡の破壊が進むことへの危惧から、遺跡の性格を把握する必要性が高まりました。今年度は地権者のご協力を賜り、測量調査を実施することができました。新しい測量技術である赤色立体地図化によって、鮮やかに南森の現況が浮かび上がり、今後調査を行ううえで貴重な情報が得られました。

本市は、北に丘陵、南に沃野と豊かな自然に恵まれ、古墳時代の遺跡や古墳が数多く存在します。特に古墳は、大塚遺跡等の方形周溝墓や蒲生田山古墳群等の古墳時代前期の古墳から奈良時代の二色根古墳群等の終末期古墳まで、130 基以上の古墳が確認されております。平安時代には古代置賜郡衙が所在していたと推定される歴史のまちです。市内には、このような悠久の歴史を物語る埋蔵文化財が数多く眠っております。

埋蔵文化財は地域の歴史を明らかにし、地域の宝として世代を越えて伝えられ、人々の地域への愛着やそこに生きる人々の誇りと自負を育んでいくものであり、遺跡を保護し大切に後世へと引き継いでいく責任があると考えます。平成 28 年度に実施した測量調査は、南森の調査とその保護の第一歩となるものです。今後も地権者の方々をはじめ関係各位のご支援、ご協力を賜りますことをお願い致します。最後になりましたが、調査にご指導、ご協力をいただいた関係各位に、厚くお礼を申し上げます。

平成 29 年 3 月

南陽市教育委員会
教育長 猪野 忠

凡例

- 1 本報告書は、平成 28 年度に南陽市教育委員会が作成した測量図等を活用し、従前の諸調査の成果をまとめた報告書である。
- 2 調査は南陽市教育委員会が実施した。
- 3 調査期間は、平成 28 年 9 月 1 日から平成 29 年 3 月 31 日までである。
- 4 調査体制は次のとおりである。
調 査 員 角田朋行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）
主 幹 課 社会教育課
主幹課長 社会教育課長 佐藤賢一
埋蔵文化財係技能士 鈴木輝生
長岡南森遺跡航空レーザー測量業務 アジア航測株式会社
- 5 本報告書の作成、執筆は、角田朋行が担当した。
- 6 挿図の縮尺はスケールで示した。
- 7 写真図版は任意の縮尺で採録した。
- 8 縦横断図、全長、盛土容量等の計算は、LB ビューワシステム（アジア航測株式会社）を使用した。
- 9 本文中、古墳時代前期・中期・後期の年代観や 4 世紀前葉・中葉・後葉・末葉の 4 区分の時期については、「やまがたの古墳時代―最上川流域のムラの古墳―」（2011 年 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館発行）の時代区分に従った。
- 10 本調査にあたっては、次の方々によるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）
佐藤鎮雄、佐藤庄一、吉野一郎

目 次

I 調査の概要	
1 調査の概要と目的	1
2 調査方法	1
3 測量方法と経過	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
(1) 周辺の遺跡	2
(2) 市内の古墳	5
(3) 市内の古墳時代の集落遺跡	8
III 調査の経過	
1 これまでの調査経過	9
2 これまでの調査結果	9
(1) 遺物について	9
(2) 字限図から見た南森丘陵の平面形態について	10
IV 調査の成果	
1 形態と規模	13
(1) 全体概要	13
(2) 丘陵南半部の現況と地形改変状況	13
(3) 丘陵北半部の現況と地形改変状況	13
(4) 墳丘・墳形の推定	14
2 墳丘に関する比較検討	18
3 まとめ	22
4 遺跡の保護と今後の調査について	25
(参考) 南森館跡	26

挿図目次

第 1 図	計測飛行ルート	1
第 2 図	長岡南森遺跡の位置	3
第 3 図	南森丘陵周辺字境図	3
第 4 図	長岡南森遺跡周辺遺跡図	4
第 5 図	市内平野部の古墳時代(終末期含)の遺跡位置図	6
第 6 図	南森丘陵表採遺物写真及び実測図	10
第 7 図	南森丘陵及び周辺字限図(明治 8 年)	11
第 8 図	稲荷森古墳周辺字限図	12
第 9 図	稲荷森古墳周辺土取跡推定図	12
第 10 図	字限図からの南森周辺土取跡等推定図	12
第 11 図	南森及び周辺地形図	15
第 12 図	地形図	16
第 13 図	南森古墳墳丘推定図	17
第 14 図	南森古墳推定図との比較図	19
第 15 図	南森丘陵地形図との比較図	20
第 16 図	南森丘陵の縦横断図	21
第 17 図	南森古墳全長に係る測量データ	22
第 18 図	南森館跡略図	26

図版目次

図版 1	南森(西から)	30
図版 2	南森空中写真、冬の南森	31
図版 3	南森と稲荷森古墳	32
図版 4	稲荷森古墳から見た南森、(推定)前方部前端	33
図版 5	(推定)前方部西側と整地帯、(推定)前方部頂	34
図版 6	(推定)前方部東側、(推定)前方部の前方部墳頂	35
図版 7	(推定)くびれ部東側、(推定)くびれ部西側～切土された後円部	36
図版 8	(推定)後円部西側、(推定)後円部南側及び低地	37
図版 9	(推定)後円部南側及び低地、(推定)後円部南側	38
図版 10	(推定)後円部南東側及び低地、(推定)後円部東側張出部	39
図版 11	(推定)後円部切土斜面の竪穴住居跡、昭和 20 年代の南森	40
図版 12	丘陵南半部南側の古墓地、十字刻印のある万年塔型墓、館跡	41

南森測量調査報告書

(古墳推定地に関する調査)

I 調査の概要

1 調査概要と目的

(1) 調査期間 平成 28 年 9 月 26 日～平成 29 年 3 月 28 日

(2) 調査場所 山形県南陽市長岡字南森、字南森西、字清水尻、字西田中南、字西田

(3) 調査目的

対象地は、長岡南森遺跡として知られる独立丘陵である。遺跡は、縄文中期、弥生、古墳、平安、中世の遺跡として登録されている。以前から地元では大型古墳ではないかと言われていたが中世城館等による後世の改変が大きく、山林及び営農地であったことなどから、これまで十分な調査が行われなかった。近年、周辺土地開発が急激に進んできたことから、遺跡保護を図るために遺跡の現状と性格を把握する必要性が課題となり、遺跡台帳の整備のための測量調査が実施された。今次はこの測量成果を元に、古墳推定地に関する検討と今後調査を進めるための検討を行うことを目的とする。

2 調査方法

調査地の現況は、畑地、墓地、神社、耕作放棄地及び山林で、民有地であることから、事前に地権者から測量調査を行う承諾を得て、落葉後に航空レーザー測量及び現地での補助測量を実施している。周知の遺跡名は長岡南森遺跡であるが、地名を遺跡名とする原則から本報告においては、古墳は南森古墳、館跡は南森館跡とする。丘陵名は、南森丘陵とし、南森丘陵とその周辺平地を含んだ地域を南森と称する。

3 測量方法と経過

測量計画は、GNSS衛星配置等を考慮し、計測諸元、飛行コース、GNSS基準局の設置場所及びGNSS観測について作成し、1m×1mに4点の計測データを取得するものとした。測量機材は、必要に応じ「公共測量作業規定の準則」に定める検定を第三者機関より受けたものを使用した。

南森丘陵の3次元航空レーザー測量は航空レーザー計測システム及びGNSS/IMU装置を搭載した回転翼機を用いて実施した。調査面積0.04km²について、2コースを対地高度500m、飛行速度72km/hで飛行し計測した。

航空レーザー測量データ（GNSS基準局のGNSS観測データ、航空機上のGNSS及びIMU観測データ、レーザ測距データ）を統合解析し、地表のレーザー照射位置の三次元座標を求めた。調整用基準点を設定し、三次元計測データを補正した。

補正後のオリジナルデータから、建物や植生等の地物を除去したグランドデータを作成、これを基に等高線データ、赤色立体地図となる地形表現図を作成した。



第1図 計測飛行ルート

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

南陽市は、山形県南部、米沢盆地の北東部にあたり、北緯 38 度 1'11" ~ 38 度 13' 25"、東経 140 度 14'11" ~ 140 度 14'17" に位置する。市域の南北の長さは約 22.6 km、東西は約 14.8km で、面積は約 160.70km² である。

市域は「北に丘陵、南に沃野」と称されるように、北部は山地と丘陵地域が広がり、最北端に白鷹山がそびえる。南部は吉野川と織機川等によって形成された宮内扇状地が占める。宮内扇状地の東には広大な大谷地が広がり、当地域の風景と地形を特色づけている白竜湖が存在する。扇端を最上川が西流から北西流し、市域の境界線となっている。

南森丘陵は、宮内扇状地の東南部に位置し、山形県南陽市長岡字南森に所在する。大平山地南端に位置する烏帽子山から、大谷地南西縁辺に沿うように南に向かって連なる独立孤丘群のひとつである。周知の長岡南森遺跡は、南森丘陵とその周辺を囲む低地を範囲とし、県内最大の前方後円墳として知られる国指定史跡稲荷森古墳からは南東へ約 130 m の距離に位置し、南陽市郡山の J R 奥羽本線赤湯駅から南東へ約 1.2km の位置にあたる。

南森丘陵東側には長岡地区の集落があり、西・南側は数年前から宅地化が進んでいる。丘陵北半は主に果樹園や畑地として利用されていた。丘陵南半には神社と墓地があり、主に山林となっている。かつては丘陵を取り巻くように幅の広い低地が取り囲んでいた。

これまでの調査から南森丘陵の西方約 100m を旧河道が北から南へ流れていたとみられ、長岡堤やまないたやなぎ 柳堤はその名残と考えられる。旧河道は丘陵の南で東へ折れ南東方向へ向きを変えて流れたと考えられ、丘陵は旧河道に張り出すように位置する。長岡山丘陵の南端に位置する稲荷森古墳も同じ旧河道の東に位置し、川に対し岬のように張り出した丘陵先端の地形を利用して築造されている。

長岡南森遺跡の所在地は、南陽市長岡字南森、字南森西、字清水尻、字西田中南、字西田、俎柳字六百刈で、南森丘陵の主要地番は長岡字南森 1650 番地の 1 となっている。

2 歴史的環境

南陽市では、平成 29 年 3 月現在で 288 箇所¹の遺跡が確認されている。南森丘陵周辺の遺跡を概観し、続けて市内の古墳と古墳時代の遺跡について述べる。

(1) 周辺の遺跡

旧石器時代・縄文時代の遺跡は、長岡山丘陵に立地する長岡山遺跡とその東側に広がる長岡山東遺跡が知られている。いずれも南森丘陵の北約 130m に位置する。

弥生時代の遺跡は、南森丘陵の西約 1.2km に十数基の再葬墓が確認された百刈田遺跡が位置し、南森丘陵からもアメリカ式石鏃が表採されている。

古墳時代には、長岡山丘陵の南端に稲荷森古墳、長岡山丘陵上に長岡山古墳群（4 基の方形周壕墓と古墳主体部 1 箇所）が確認されている。長岡山古墳主体部（SH53）からは袋状鉄斧、ヤリガンナ、のみ 鑿、てつぞく 鉄鏃、鉄剣が出土している。稲荷森古墳では古墳築造前の丘陵面に掘り込まれた塩釜式期の竪穴住居跡が検出されており、南森丘陵でも切土法面のりめんに露出した地山に掘り込まれた竪穴住居跡から 3 世紀末頃の北陸系甕等が出土している。

平安時代の遺跡は、長岡山遺跡、長岡山東遺跡、長岡南森遺跡のほか、南森丘陵の北西約 630m の矢ノ目館跡から西には古代置賜郡衙に関連する大規模な遺跡群として知られている郡山遺跡群が広がり、沖郷・宮内地区を中心とする沖郷条里制の存在が指摘されて



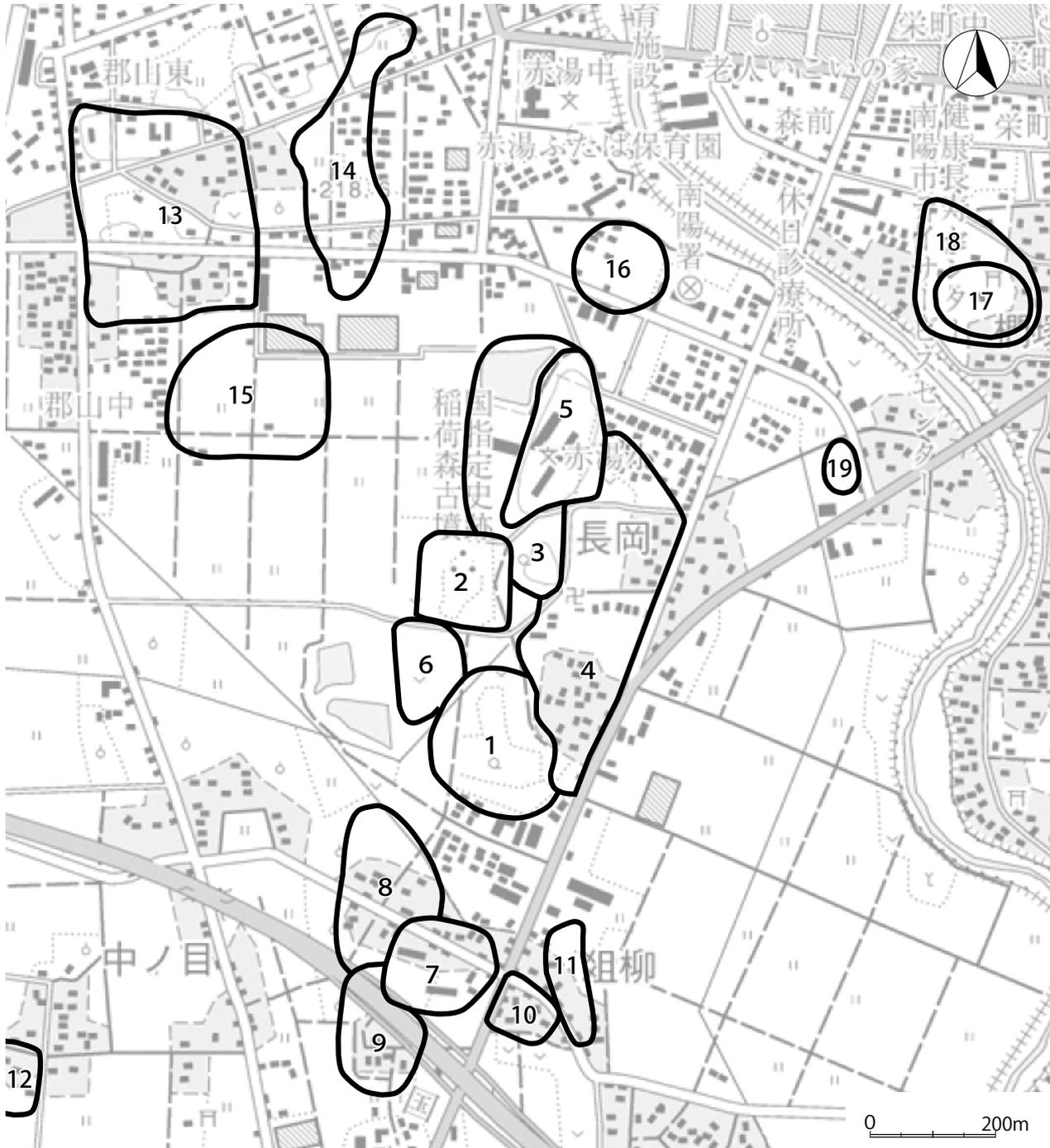
第2図 長岡南森遺跡の位置 S= 1/25000



第3図 南森丘陵周辺字境図 S= 1/8000

る。また、長岡山遺跡や稲荷森古墳からは、円面硯や墨書土器等、官衙や寺院の存在をうかがわせる遺物も出土している。

中世の遺跡では、長岡山丘陵上に湯野目氏が居住したと伝わる長岡館跡があり、南森丘陵上にも南森館跡があったと推測される。南森丘陵の南側では旧河道を挟んで内城館跡が立地し、さらに南には鶉ノ木館跡がある。



番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代
1	長岡南森遺跡	縄文～中世	6	長岡西田遺跡	縄文、平安	11	水上遺跡	中世	16	李の木遺跡	平安
2	稲荷森古墳	古墳	7	内城館跡	中世	12	南屋敷館跡	奈良・平安	17	柵塚館の山遺跡	縄文、中世
3	長岡山遺跡	旧石器～中世	8	中ノ目下遺跡	平安	13	矢ノ目館跡	奈良～中世	18	柵塚館跡	中世
4	長岡山東遺跡	旧石器～中世	9	鶉ノ木館跡	古墳～中世	14	東六角遺跡	縄文、平安	19	太子堂遺跡	平安
5	長岡館跡	中世	10	熊の前館跡	中世	15	早稲田遺跡	平安			

第4図 長岡南森遺跡周辺遺跡図 S= 1/10000

(2) 市内の古墳

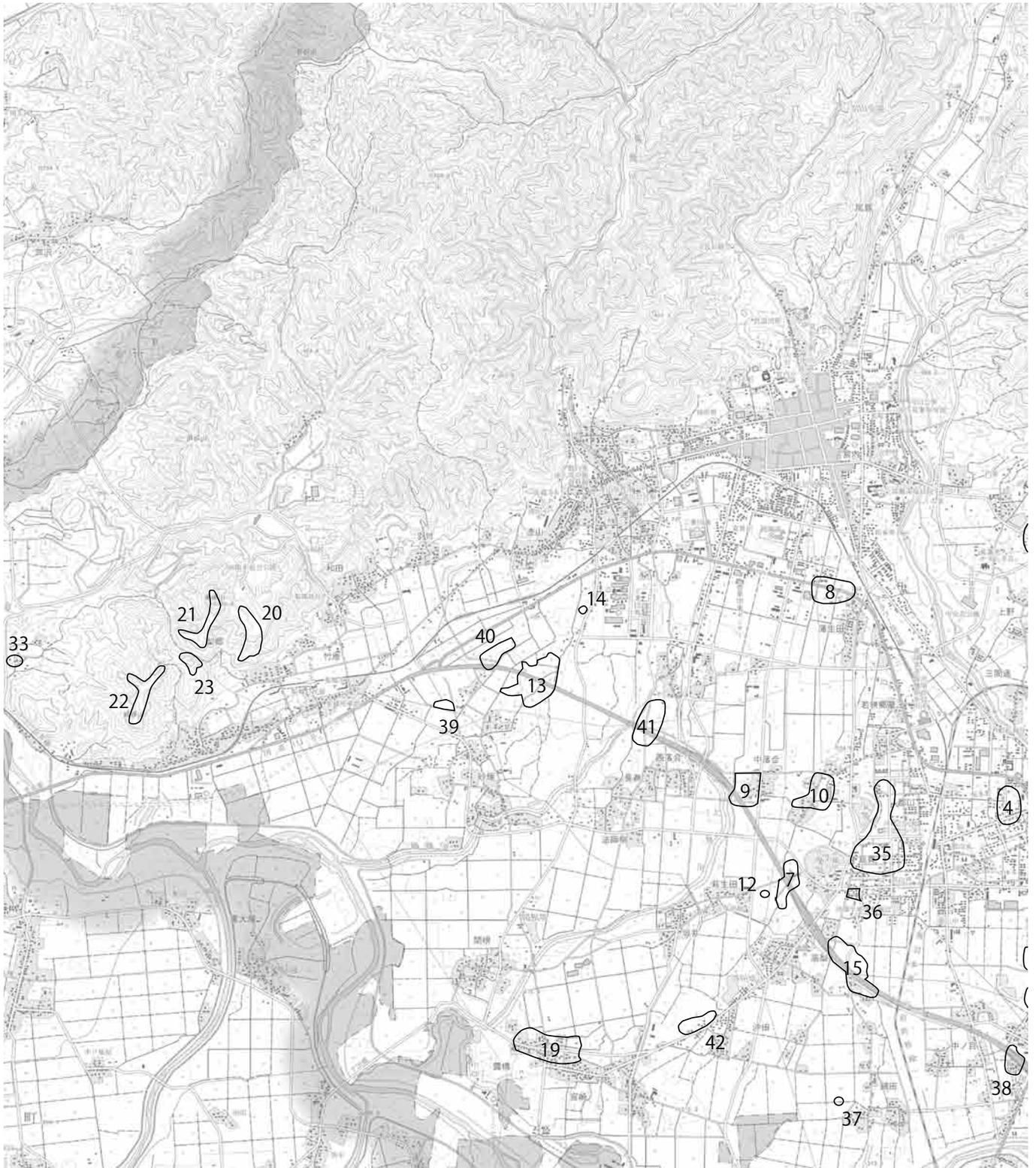
南陽市では、戦前から数多くの終末期古墳（奈良時代の墳墓）の存在が知られていたが、その多くは葡萄園の開墾等によって消滅している。近年、市教育員会の踏査等により古墳の位置とその数が次第に把握されつつあり、現在、周溝墓 24 基、古墳 56 基、終末期古墳 48 基の所在地が確認されている。このうち発掘調査で確認されたものや開発工事等で失われ、現在見ることができないものは周溝墓 24 基、古墳 8 基、終末期古墳 7 基である。

地域毎に見ると、吉野地区 3 基、赤湯地区 58 基、沖郷地区 20 基、梨郷地区 41 基、漆山地区 1 基、中川地区 5 基となる。古墳が多いのは赤湯と梨郷である。赤湯地区は丘陵部に終末期古墳が多く、平野部には大型前方後円墳の稲荷森古墳が存在する。梨郷地区では標高の高い山の尾根に沿って多くの古墳がみられる。沖郷地区等では、宮内扇状地上に発達した自然堤防上に古墳の分布がみられる。市域の中央を占める宮内地区は古くからの住宅地であるため調査が進んでおらず古墳も確認されていない。

周溝墓及び周溝墓の可能性のある周溝は、赤湯地区では長岡山古墳群（長岡山遺跡）で 4 世紀代とみられる方形周溝墓 3 基、諏訪前遺跡で古墳時代前期の方形周溝 1 基と円形周溝 1 基が確認されている。沖郷地区では大塚遺跡で 4 世紀後半の方形周溝墓 11 基、清水上遺跡で古墳時代前期の方形周溝墓 2 基、中落合遺跡で方形周溝 1 基が確認されている。中落合遺跡からは昭和 55 年の調査時に管玉くだたまが出土している。沖郷の萩生田遺跡では古墳は未確認であるが金環かわどいが出土している。川樋盆地に位置する中川地区では加藤屋敷遺跡において方形周溝が 1 基確認されている。方形周溝から遺物は検出されなかったが、加藤屋敷遺跡の下流に位置する岩屋堂 2 遺跡の立会調査で古墳時代前期の器台が出土している。

古墳時代前期の古墳は、赤湯地区では 4 世紀中葉とされる全長約 30m の前方後方墳である蒲生田山 3 号墳かもうだやま、4 号墳と前方後円墳の蒲生田山 2 号墳、4 世紀前葉～中葉の鉄製品が出土し、無墳丘墓の可能性もある長岡山古墳、全長 96 m の前方後円墳である稲荷森古墳がある。沖郷地区では大塚遺跡 257 号墳や隣接する馬の墓古墳が前期の方墳とみられる。このほか未確認ではあるが、旧河道の自然堤防に位置する富塚遺跡等にも大塚遺跡に類似する古墳又は墳丘墓が存在した可能性がある。梨郷地区では天王遺跡で 3 基の古墳時代前期の円墳が確認されている。天王遺跡と同一の自然堤防上には漆山地区の西高堰古墳が立地する。弥生時代の再葬墓群が検出された百刈田遺跡からは古墳時代前期～中期の祭祀用弦楽器と考えられる筑形木製品ちくが出土し、稲荷森古墳等の古墳祭祀との関係が推定されている。

古墳時代中期～後期の古墳は、赤湯地区では急斜面に立地し、合掌型の箱型石棺を有する積石塚古墳の松沢古墳群が 6 世紀の古墳とみられている。同じく大谷地を眼下に見下ろす十分一山の枝尾根頂上にある七両坂古墳じゅうぶいちやまが後期の横穴式古墳と考えられ、十分一山古墳群も類似の古墳である可能性がある。沖郷地区では吉野川旧河道の自然堤防上に築かれた 5 世紀前半の円墳である植木場一古墳が確認されている。梨郷地区では梨郷山中古墳群と称される天王山古墳群（円墳 7 基、方墳 1 基、前方後円墳 4 基、前方後方墳 1 基）、竜樹山古墳群（方墳 8 基、前方後円墳 1 基、前方後方墳 1 基）、経塚山古墳群（円墳 2 基、方墳 3 基、前方後円墳 2 基、前方後方墳 2 基）、稲荷山古墳群（円墳 2 基、方墳 2 基、前方後円墳 1 基）の計 37 基の古墳が存在し、主に古墳時代中期～後期とみなされている。吉野地区では向畑 C 遺跡に 3 基のマウンドが存在し、朱泥で目張りした石棺からは勾玉が



- | | | |
|----------|------------|----------------|
| 1 長岡南森遺跡 | 11 加藤屋敷遺跡 | 21 竜樹山古墳群 |
| 2 稻荷森古墳 | 12 馬の墓古墳 | 22 経塚山古墳群 |
| 3 蒲生田山古墳 | 13 天王遺跡 | 23 稻荷山古墳群 |
| 4 諏訪前遺跡 | 14 西高堰古墳 | 24 上野山古墳群 |
| 5 長岡山遺跡 | 15 百川田遺跡 | 25 上野山古墳群大沢山支群 |
| 6 長岡山東遺跡 | 16 松沢古墳群 | 26 上野山古墳群長峰山支群 |
| 7 大塚遺跡 | 17 七両坂古墳 | 27 狸沢山古墳群 A 支群 |
| 8 清水上遺跡 | 18 十分一山古墳群 | 28 狸沢山古墳群 B 支群 |
| 9 中落合遺跡 | 19 植木場一遺跡 | 29 山居沢山 B 遺跡 |
| 10 萩生田遺跡 | 20 天王山古墳群 | 30 二色根古墳群 |



- | | |
|-----------|---------|
| 31 烏帽子山古墳 | 41 檜原遺跡 |
| 32 松沢横穴 | 42 富塚遺跡 |
| 33 梨郷古墳群 | |
| 34 砂利山古墳群 | |
| 35 沢田遺跡 | |
| 36 西原東遺跡 | |
| 37 寺田遺跡 | |
| 38 鶉ノ木館跡 | |
| 39 清水ノ下遺跡 | |
| 40 掛在家遺跡 | |

第5図 市内平野部の古墳時代（終末期含）の遺跡位置図 S=1/40000

出土したとの話から古墳と思われるが、その性格、時代ともにはっきりとしていない。

奈良時代の墳墓であるいわゆる終末期古墳は、赤湯地区では秋葉山南側の蒲生田山古墳群、上野山南側の上野山古墳群、狸沢山古墳群、二色根山南側の二色根古墳群等に数多くの古墳が存在した。蒲生田山古墳群は、かつて山居沢山古墳群や三居沢山古墳、横山古墳とも呼ばれ、赤湯町史には13基の終末期古墳が記された地図が掲載されているが、現存する終末期古墳は1号墳のみで直径8mの山寄式円墳である。山居沢山B遺跡内にはこの地図には記載が無い山居沢山古墳の円墳1基が現存している。上野山古墳群には、かつて大沢山古墳、長峰山古墳、夷平古墳と呼ばれた古墳群が含まれ、現在は上野山古墳群14基、上野山古墳群大沢山支群1基、上野山古墳群長峰山支群4基が残る。狸沢山古墳は、横沢古墳とも呼ばれ10基以上の墳墓があったとされる。平成26年に新たな一群が発見され、従来の狸沢山古墳群をA支群、新規発見の一群をB支群とした。狸沢山古墳群A支群は4基からなり奥壁石のみ残存する。狸沢山古墳群B支群は6基の山寄式円墳が現存する。二色根古墳群は6基の古墳が知られ3基が現存している。大平山地最南端に位置する烏帽子山からは勾玉が出土し烏帽子山古墳があったとされている。

また、横穴墓の可能性のある横穴が松沢古墳群の立地する山の南斜面に複数存在したと伝わっており、道路工事の切土によって松沢山横穴が1基のみ道路脇に露出している。横穴墓であれば県内では初確認となる。梨郷地区では、最上川を西に臨む平野地区の神楽山周辺に梨郷古墳群が存在した。古墳は相当な数があったとされるが昭和初期に既に破壊されており現況では確認できない。中川地区では、川樋地区の鷹戸山東斜面に4基の山寄式円墳状のマウンドが存在する。未調査であることや周辺では鉾山由来のズリ山も多いことからその性格については今後の調査を待つ必要があるが、地元では坂上田村麻呂東夷征伐の戦死者を葬った古墳があると伝わっており、市遺跡台帳上は砂利山古墳群として登録されている。

(3) 市内の古墳時代の集落遺跡

古墳時代の集落関連遺跡を地区別に見ると、沖郷地区と赤湯地区に集中している。

沖郷地区では、自然堤防上や河間低地に遺跡の立地がみられる。沢田遺跡は南森丘陵から北西へ約1.5km、弥生時代から中世まで続く大きな遺跡である。古墳時代前期から中期中葉まで集落が存在した可能性がある。近隣の西原東遺跡では古墳時代中期中～後半の遺物が確認されている。筑形木製品が出土した百刈田遺跡（古墳時代中期後半）は南森丘陵から西へ1.6kmである。寺田遺跡は南森丘陵から西南へ1.5kmで古墳時代前期の壺型土師器が体出土している。胴部下部に焼成後穿孔があり、祭祀遺跡や周溝墓等が存在する可能性もある。南森丘陵から南へ約450mの鶴ノ木館跡では古墳時代の溝跡が検出され調査区北方に古墳時代の遺跡があると推測されている。

赤湯地区では、南森丘陵から北へ200mに古墳時代前期から後期まで続く長岡山遺跡、長岡山東遺跡が位置する。長岡山東遺跡では一部発掘調査が実施され、供献土器が多く出土する傾向を示している。祭祀の場や墓域があった可能性が指摘され、稲荷森古墳等の造営や祭祀にかかわっていた可能性のある集落があったものと推測されている。

梨郷地区では、古墳時代中期後半の清水ノ下遺跡が知られる。古墳時代後期の掛在家遺跡は縄文時代から奈良時代まで続く複合遺跡である。いずれも自然堤防上に立地する。

中川地区では、加藤屋敷遺跡の周辺において古墳時代の遺物が確認されており、付近に未確認の遺跡があるものと推測される。遺跡は東向きの緩斜面に立地する。

III 調査の経過

1 これまでの調査経過

南森は、地元では通称「狸森」^{たぬきもり}とも呼ばれ、稲荷森（通称「狐山」^{きつねやま}）とともに遺跡は古くから知られていたが、昭和 53 年の稲荷森古墳調査団によってその存在が確認された。遺跡名は長岡南森遺跡である。当時採集された遺物は、縄文時代中期の土器、磨製石斧等の石器、古墳時代前期～中期の土師器、平安時代の須恵器である。

昭和 62 年の南陽市史考古資料編では、長岡山遺跡とともに稲荷森古墳に関連する集落が存在したものと推測されている。この時期、市史編さん事業に伴う踏査により底部穿孔^{せんこう}土師器が南陽市史考古資料編執筆者であった佐藤鎮雄氏によって採集されたが、稲荷森古墳の発掘調査及び史跡整備事業が始まり、平成 2 年には蒲生田山古墳群の発掘調査等のため、長岡南森遺跡の調査を進めることはできなかった。

平成 3～4 年、市教育委員会の吉野一郎、角田朋行が踏査を行った。その結果、丘陵西側畑地から二重口縁土師器壺片を採集し、丘陵の形状から大型古墳である可能性があることを確認した。古墳であれば後円部は大規模に削平されており主体部も破壊を受けている可能性がある^{と推定}。踏査時には「以前、丘陵南半部で大きな勾玉を拾った方がいる」との話を地権者の一人から聞き取っているが、この勾玉の所在は不明である。

平成 5 年南陽市平野部字限^{あざきりず}調査（角田）において、南森丘陵の旧状が前方後円墳に類似することを確認した。報告書は市教委内部報告 1 冊を作成、未刊行となっている。

平成 6～7 年、市教育委員会が踏査を行い、丘陵東側で高坏又は器台片を採集した。丘陵南半西側の切土法面において地山に掘り込まれた 3 世紀末頃の竪穴住居址を確認した。

平成 7 年に明治大学大塚初重氏による現地指導を受け、古墳の可能性が高いため調査を要するとの見解から、平成 8 年度に調査計画が立案されるが実施は見送られた。

平成 11 年に市教育委員会による写真撮影及び踏査を数回実施。

平成 13 年の山形県地域史研究 26 号において南森丘陵について報告（角田）。

平成 20 年に市教育委員会による踏査を実施、調査計画を再検討。

平成 23 年に埋蔵文化財担当係が新設、調査再開に向け従来の調査資料を整理する。

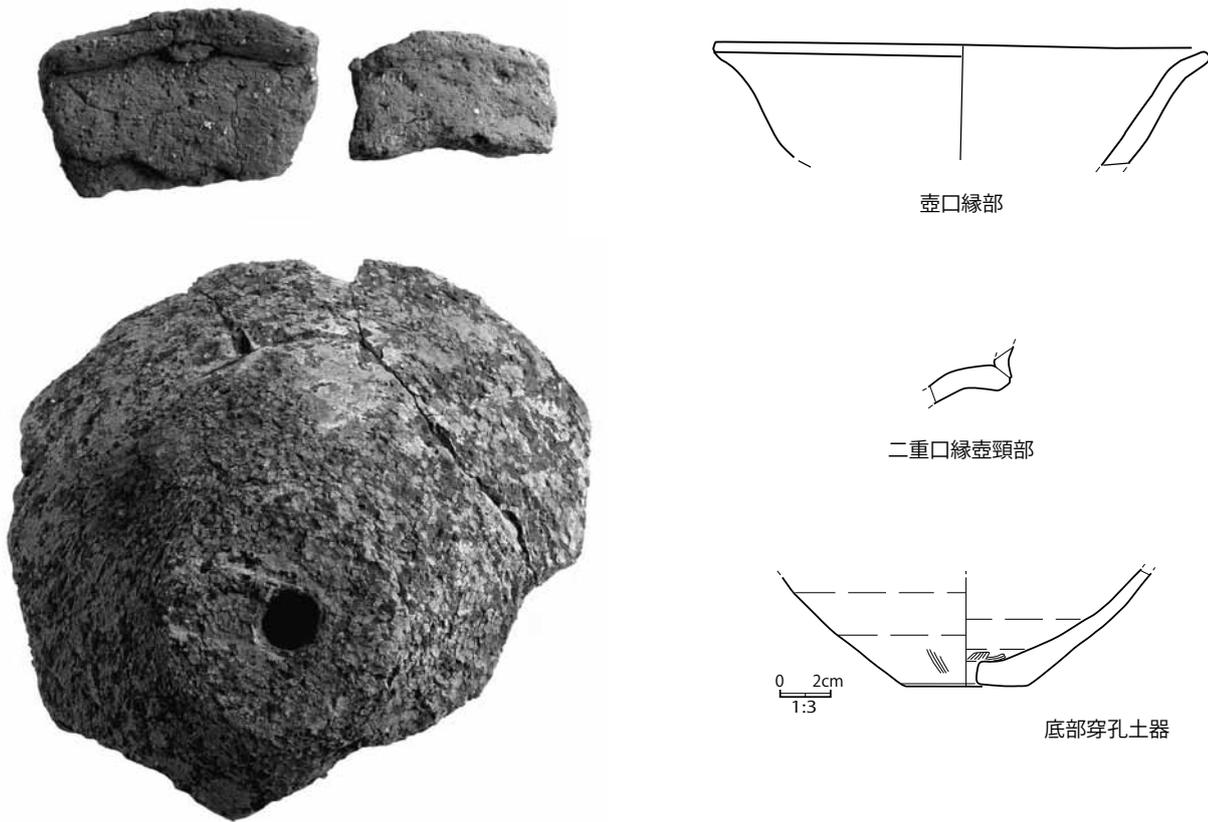
平成 26 年に南森丘陵の南西に宅地造成計画が生じたことから試掘調査を行う。トレンチ 10 本を設定し、調査を実施、丘陵の西側に幅広い低地が存在することを確認した。検出された低地の範囲は字限^{あざきりず}から予測されていた丘陵を取り囲む窪地の範囲と概ね一致した。周辺地の開発が急増し、遺跡保護との調整が課題となる。

平成 28 年度、市教育委員会により遺跡台帳整備のため航空レーザー測量調査を実施。

2 これまでの調査結果

(1) 遺物について（第 6 図）

採集された古墳時代の遺物は小片が多く、器種が分かるものは、二重口縁壺型土師器の頸部片 2 点、壺型土師器の口縁部 1 点、高坏・器台片数点、底部穿孔土器 1 点である。二重口縁壺型土師器は焼成が甘く、口縁一段目が外側に大きく張り出すなど、市内蒲生田山古墳群の 4 号墳出土の二重口縁底部穿孔土師器と類似するが、4 号墳の土器よりも大型である。焼成が甘く、磨滅のため表面調整ははっきりしない。二重口縁壺型土師器と高坏・器台は丘陵北半部の西斜面又は東斜面が南半部に接する地点の丘陵裾で採取され、底部穿孔土器は丘陵北端の北西角付近で採取されている。また時期不明だが丘陵南半部では鉄刀片とみられる鉄製品も採集されている。



第6図 南森古墳表採遺物写真及び実測図

古墳時代以前の遺物としては、縄文土器片（縄文中期）及び石器が丘陵東南部や西部を中心に全域で表採されており、丘陵上からは弥生時代のアメリカ式石鏃が表採されている。また、3世紀末頃の北陸系甕等が出土している。

古墳時代以降の遺物としては、平安時代の須恵器や土師器、中世の陶器片、小型板碑等が確認されている。総じて遺物は小片が多い。近世では、丘陵南半部の墓地に万年塔型の墓石が見られる。そのうち1基の屋根部分には十字型の刻印があり、地域に伝わる寛永年間のキリシタン弾圧（赤湯町史）との関連性も考えられる。

(2) 字限図から見た南森丘陵の平面形態について（第7図）

明治期の字限図は、江戸時代以前の絵図を別とすれば、市内に残る地図類としては最も古い貴重な情報源である。平成5年度の字限図調査以降、字限図情報について現地での地形観察と各種発掘調査等のデータ照合を行ってきた。平成23年からは字限図を電子化する作業を行っており精度を高めている。これらの調査、研究により、宮内扇状地内の耕地整理前の旧河道や自然堤防の状況が明らかとなり、字限図の情報から土地の成り立ちや、発掘調査で検出されるであろう埋没地形等のある程度事前に予想し、調査に活用することが可能となり始めている。

市内字限図の判読上、低地・湿地の土地は、水の管理上の理由から区画が小さくなる傾向が見られ、小区画地割の範囲は字限図上で低地を知るうえで判断材料となる。

稲荷森古墳では墳丘西側に小区画の畑地が南北に連続しており、古墳周辺に一定の低地があることを示している（第8図）。墳丘近くの大い区画の地割は、旧丘陵の地山ラインと推定される。また、古墳東側の丘陵切離しは後円部から約20mの距離があると推定

された。これら字限図からの判読結果の妥当性は発掘調査で概ね実証されている(第9図)。特に、後円部と丘陵地山との距離は、従来8m程度と考えられてきたが、その後の試掘調査で字限図からの判読結果と一致し18～20mの距離であることが判明している。

南森丘陵及びその周辺については、平成5年度の字限図調査でも検討しているが、今回新たに明治八年字限図のデジタルトレースを行い、土地利用毎に色分けし、2500分の1地形図に重ねて位置調整を行いながら字寄図を作成した。作成した明治期の南森丘陵は、南北に長く伸びる長形状の北半部に、東に張り出す楕円形状の南半部とになっており、平面形態は前方後円墳に類似すると見ることのできる形状である。

丘陵北半部は南北に長い長形状を呈する。北端の裾に道が走り概ね地山ラインを示すと推定される。丘陵部の東西には南北方向に伸びる地山ラインが読み取れる。これらの周囲に見られる小区画地割が低地にあたる。

丘陵南半部は東にやや膨らむいびつな楕円形又は長形状を呈する。丘陵上の区画に着目すれば、墓地の北側に小区画地割が並んでいるのが特徴的である。墓地から北東方向に窪地があった可能性もあるが、墓地の東西で地番が飛び、主たる所有者が異なるなど、墓地の東西で土地の性格又は成因にも何らかの違いがある可能性も考えられる。

南森丘陵周辺には、丘陵を取り囲む低地と地山のラインを読み取ることができ、丘陵の周囲を低地が取り囲んでいると考えられる(第10図)。特に丘陵南東部の字清水尻の沼地付近では、丘陵を中心に南から北東方向に円弧状に低地が巡っているが、この連続する



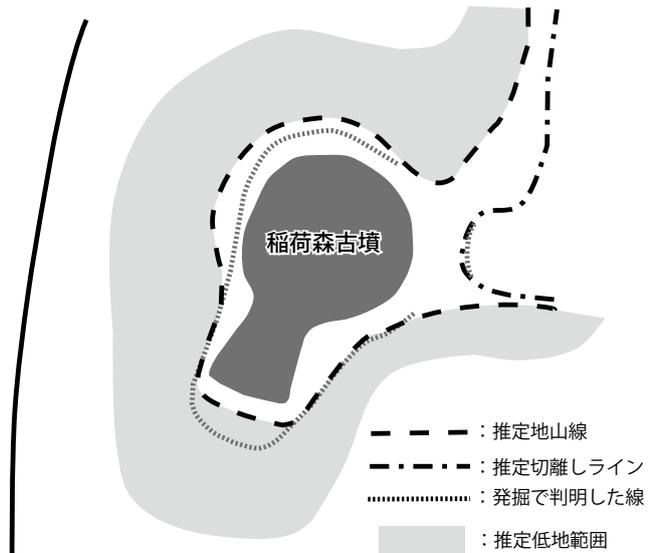
第7図 南森丘陵及び周辺字限図(明治8年) S= 1/2000

低地は宮内扇状地の傾斜方向からすれば不自然で、市内の他地区では見ることのできない人工的な地割となっている。丘陵を巡る形で何らかの大規模な土取り作業が行われた結果生じたものと推測される。近世以前の土木工事としては、古墳の築造や城館址の築城が考えられる。この低地を北へ延長した場合、土取跡の外側にもう一つ、長岡地区の集落まで含んで丘陵を取り巻く大きな区画ラインの存在も推定される。このライン内の住宅地には水路が縦横に走り等高線からもやや低い低地となっている。

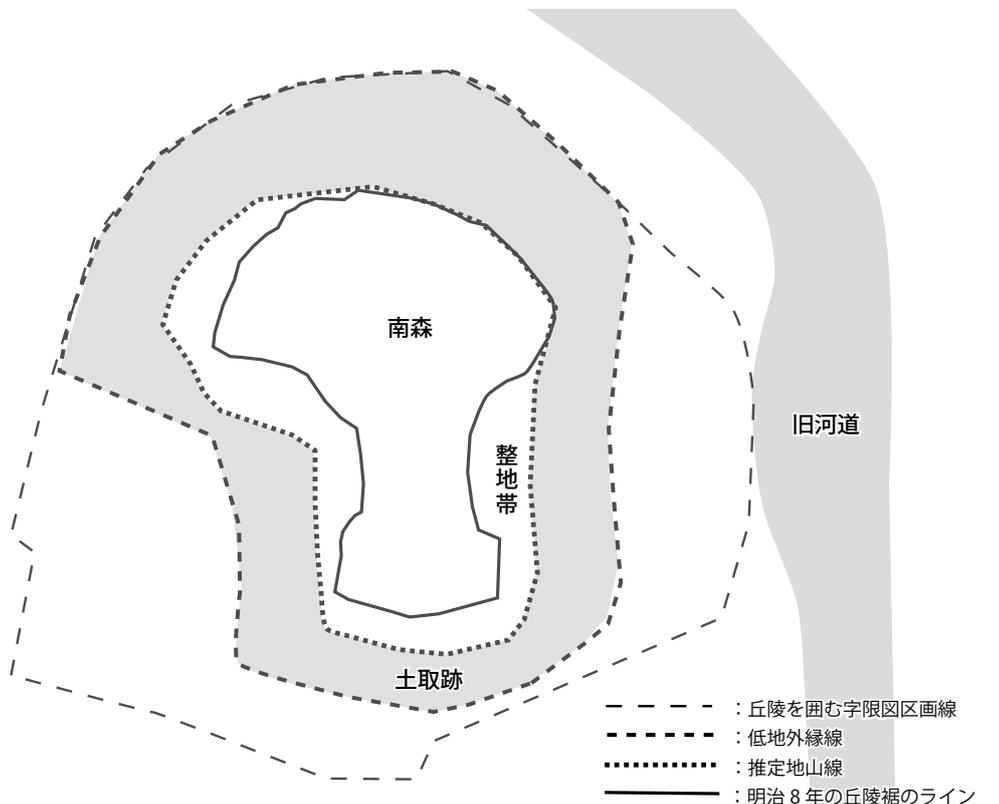
字限図からは、南森丘陵の周辺には丘陵に対して求心力が働いているような地割と区画があることが予想され、丘陵を取り巻く低地の存在と、地山ラインと現丘陵裾までの間に整地した範囲があることが推定される。



第8図 稲荷森古墳周辺字限図 S= 1/3000



第9図 稲荷森古墳周辺土取跡推定図



第10図 字限図からの南森周辺土取跡等推定図 S= 1/3000



IV 調査の成果

1 形態と規模

測量の結果は、巻頭図版及び測量図のとおりである。赤色立体地図から城館跡と思われる地形を判読できる。課題は古墳としての評価であるが、現況では地形改変が著しく、赤色立体地図を見ても万人が一見して前方後円墳と判断できるような整った形状はしていない。従前の諸調査や今次調査の結果等から慎重に検討しなければならず、正しい評価には今後の発掘調査が不可欠である。次に南森丘陵の地形改変状況を整理し、現況を踏まえながら、前方後円墳としての形状が想定されるのか検討する。

(1) 全体概況

南森丘陵の南北長は 160 ～ 168 m、丘陵北半の長さは約 70 ～ 78 m、丘陵南半は南北の長さ 80 ～ 92 m、東西の長さは現況約 130 m である。丘陵は、細長い北半部と楕円状の南半部から成るとのことになる。前方後円墳と比較した場合は、楕円状の南半部の形状が問題となる。

(2) 丘陵南半部の現況と地形改変状況

丘陵南半部の現況をみると、丘陵頂が標高 222 m 付近で平坦化しており、平面形態は、長方形に近い楕円形状となっている。この南半部は、地山の状況から元々東側に膨らむ地形がベースにあると考えられる。丘陵の西端の畑地部分も現況では張り出しているが、明治期の字限図から考えると切土による改変が主因と思われる。

南半部の地形は、多かれ少なかれ城館跡や神社等の造成による地形改変の影響を受けていると思われる。丘陵頂のやや東寄りに城館跡の主郭が位置し、その周囲には堀切や土塁、曲輪等が確認できる。主郭内部は平坦地となっており、現在は神明神社が建てられている。主郭西辺を区切る堀底道の西側のテラスには八幡神社が建てられている。南斜面には近世墓地が存在し、複数の曲輪とみられる小テラスもあり斜面は改変を受けている。丘陵北半部と接する付近の斜面の両側には弧状のテラス帯が若干認められる。

南辺の丘陵裾には農道が弧を描いて巡り、農道の南側には現況 30 ～ 50cm の段差がある低地が丘陵裾に沿って南辺から西辺へ巡っている。この低地の幅は字限図調査及び平成 26 年の試掘調査の結果から 50 ～ 60 m の幅で丘陵を巡ると考えられる。

丘陵頂の平坦面では所々で地山が地表面に露出している状況が見られる。南半部の中央より西側ほどその傾向が強く、表土層があっても薄いことから、丘陵表土は館の造成等により削られている可能性が高い。丘陵西端を切土した法面では、地山面に掘り込まれた 3 世紀末とみられる竪穴住居跡が確認されていることから、この地点は自然丘陵本来の高さに近いとみられる。

(3) 丘陵北半部の現況と地形改変状況

丘陵北半部の平面形態は、北端部に向かうにつれてわずかな弧を描いて広がる長方形である。南から北へ中程までは丘陵幅は概ね一定であるが、中程からは北端部に向かって広がる傾向を示す。その西斜面の丘陵裾は明瞭で、斜面半ばには南北に延びる 1 段のテラス帯がある。東斜面は緩斜面で丘陵裾の線は不明瞭であるが、地権者によれば葡萄園造成工事による盛土等が原因と思われ、丘陵裾の線は字限図や赤色立体地図から読み取ることができる。また平成 6 年には東斜面半ばでの営農に伴う深掘りに立会い、葡萄園造成に伴う盛土により緩斜面化していることを確認している。北半部西側には幅 15 m の整地帯がある。東側は重機で均したとされ西側同様の整地帯があった可能性もある。

北端辺は、現在農道が直線的に区切っているが、農道整備前の字限図では北に張り出す緩弧状を呈している。平成3年頃までは農道北側に30～50cm程の段差のある低地があり、丘陵裾に沿って巡っていたが、現在は農地として盛土され高低差はほとんど無い。この農道北側に元々の丘陵裾が埋没していると思われる。

丘陵頂の平坦面は、北端付近でやや高まる。丘陵頂を削平した際に削り残したか、或は元々何らかの部分的な高まりがある可能性が考えられる。北端付近ではさらに堀切と豎堀が穿たれ地形改変を受けている。南半部に至る丘陵頂平坦面には明確な傾斜変換線は無く、緩やかにスロープ状に立ち上がって南半部に至っている。

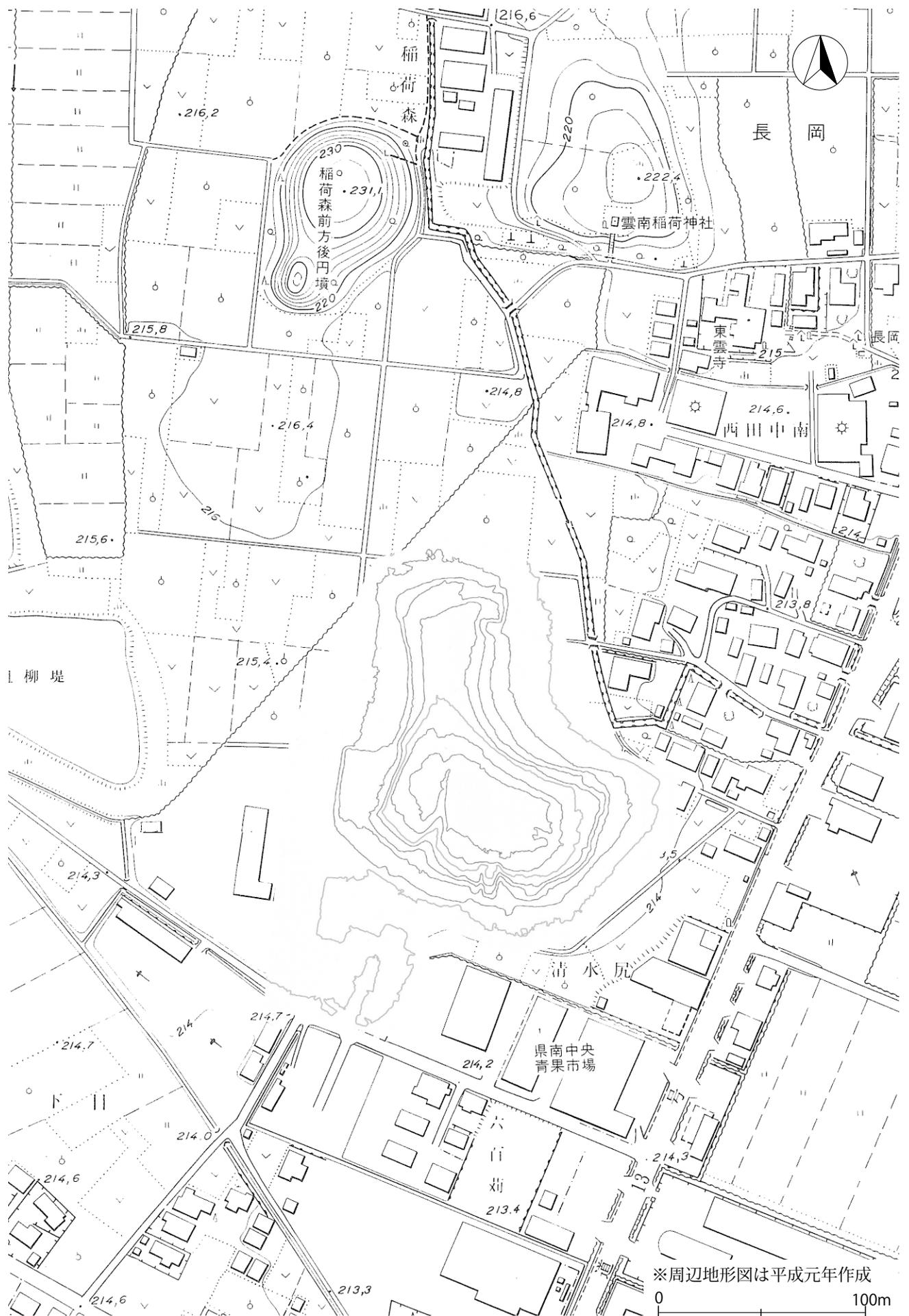
(4) 墳丘・墳形の推定

これまでの判明している事項は以下のとおりである。

- ①南森丘陵を幅広く浅い人工的な低地が取り巻く
- ②主として丘陵北半部西側に本来の地山ラインと現在の丘陵裾との間に整地帯がある。
- ③丘陵北半部の平面形状は前方後円墳の前方部に類似する。
- ④丘陵北半部の北端丘陵頂が部分的にやや高まっている。
- ⑤丘陵南半部は中世城館跡等による地形改変が見られる。
- ⑥二重口縁土師器壺、高坏等が出土している。その位置は古墳で言えばくびれ部である。
- ⑦底部穿孔土器が出土している。その位置は古墳で言えば前方部西角である。
- ⑧丘陵南半部からは、勾玉が出土したと伝わり、時期不明であるが鉄刀の可能性もある鉄製品が表採されている。
- ⑨丘陵の南北方向の長軸の長さは160～168mである。

以上、従前の調査と今次調査成果から、南森丘陵が後円部に改変を受けた前方後円墳である可能性は少なからずあるのではないかと推測される。そこで前方後円墳と仮定して、墳形を推定した場合に改変された前方後円墳としての妥当性がどの程度見られるかを検討していく。以下、南森丘陵の南半部を後円部、北半部を前方部と仮定する。

初めに後円部について検討する。くびれ部に残る墳麓線等から概ね南北径92mの円を描くことができる。さらにその中心点を基準にくびれ部の墳丘斜面上部に残る円弧に併せて円を描くと、段築一段目の肩ラインとなるような直径約70mの円を想定することができる。前方部西斜面のテラスを段築と考えれば後円部にも段築があった可能性を考える必要がある。近隣の事例として稲荷森古墳の後円部を墳麓線が同じ大きさになるように拡大して重ねると、稲荷森古墳の段築一段目の肩のラインは想定した南森古墳の段築一段目の円と概ね一致が見られる。稲荷森古墳は段築の1段目が2、3段目に比べ高いという特徴を有し、その高さの比は10：4：3～4である。稲荷森古墳の1段目の高さは後円部では約5mで、南森古墳の現況墳頂高は6～7mである。稲荷森古墳では岬状に張り出した旧丘陵の地山を削り出して墳丘1段目を成形し、2段目以上を盛土により構築している。南森丘陵を同様の手法で削り古墳を築造したとすれば、後円部の1段目より上部が東側へ崩され、後円部が概ね段築1段目の高さまで削平された可能性が考えられる。後円部西側にある3世紀末の豎穴住居跡の存在から、南森古墳の段築1段目の高さは旧丘陵に近いという点も稲荷森古墳の築造状況と類似する。仮に3段築成で各段築の高さの比が稲荷森古墳に類似し、テラス幅を前方部と同じ4mとして、単純な円錐台として堆積を求めると南森古墳の2、3段目の盛土量は、概ね7,700m³と試算される。これに対して後円部東側の



第11図 南森及び周辺地形図 S= 1/2500

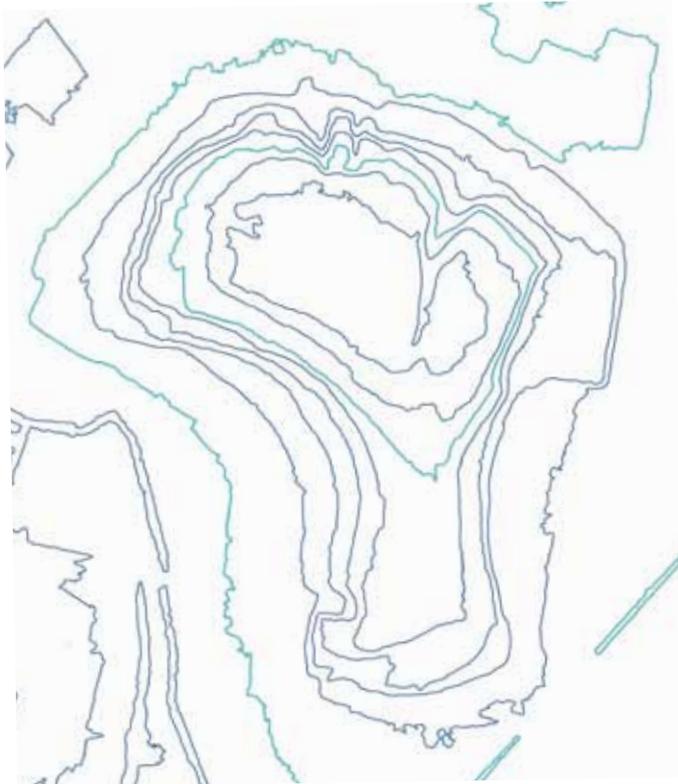
張り出しは、測量成果を元に地山を標高 215.5 mとして容量計算システムで計算すると、その土量は 7,795m³という結果となる。これは後円部の 2、3 段目の推定盛土量と近似する。あくまでも仮の数値による試算であるが後円部が改変された古墳という可能性を否定するような数字ではないと考えられる。稲荷森古墳と同様の比率を有した後円部の上部を崩した場合には、現況に近い状況になると推測することが可能ではないだろうか。

次に前方部について検討する。現況の形状が本来の形状かどうかは発掘調査が必要であるが、墳麓線とテラスの肩ライン、さらに墳頂部の肩ラインも同様に並行することからすれば、前方部は前方部端に向かってやや広がる形状であると推測される。前方部の長さは、前端部の位置をどこに設定するかによって概ね 70 ～ 78 mと想定される。前方部端部はやや円弧を描く可能性がある。前方部西斜面のテラスは幅 4 m前後である。これが段築とすれば北端から東側にも巡っていたと推測される。丘陵本来の地山線は現農道北側に位置するとみられ、そのラインが墳丘を囲む整地帯北端あるいは墳麓線の可能性がある。また、後円部南側の最下に位置するテラス帯も整地帯と見る場合は、整地帯が墳丘の周囲を囲うように存在するという可能性も検討する余地がある。

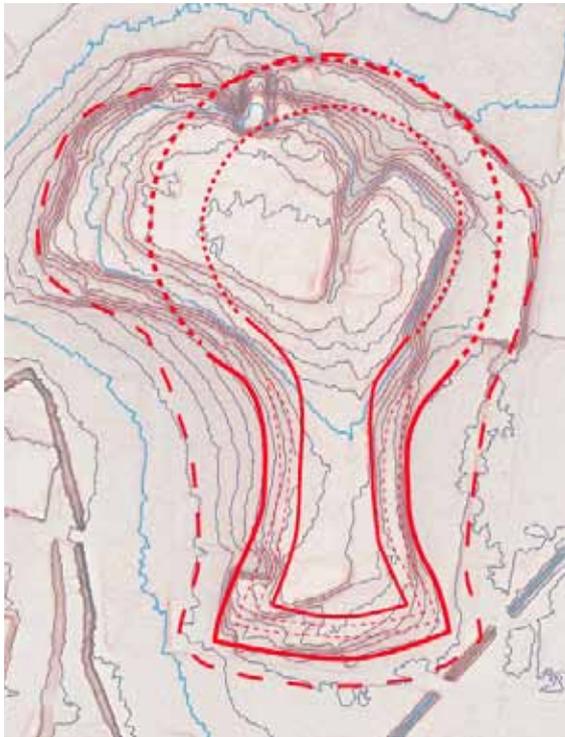
前方部から後円部に至るくびれ部については、東側において墳麓線及び段築の残存らしき弧線を見ることができる。西側ではくびれ部付近から改変が始まっており、前方部墳頂に至る作場道が作られていることからラインの乱れが見られるが、東西ともに前方部からの墳麓線が角度を変えて弧状に巡る状況を概ね見出すことはできると思われる。前方部の段築 1 段目のテラスが後円部にどのように接続するかは改変の影響で不明瞭である。

上記から、改変された前方後円墳としての妥当性は直ちに否定されるものではなく、南森丘陵を後円部が削平された前方後円墳と見ることは十分可能と考える。

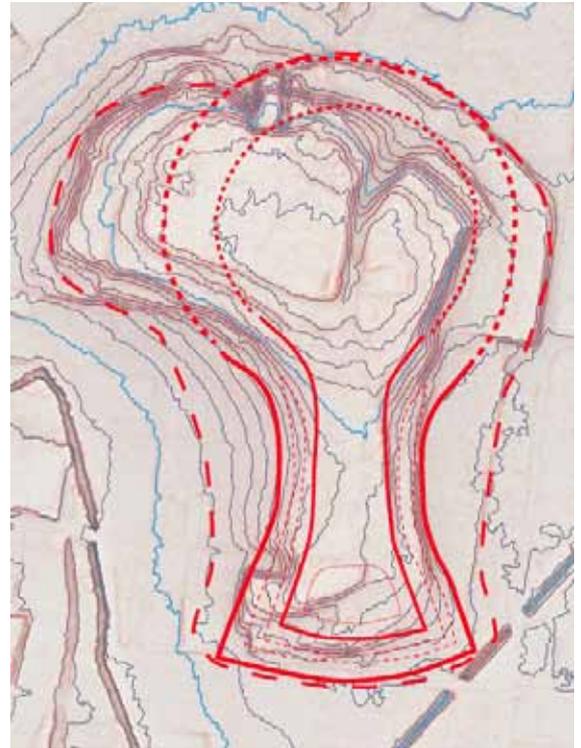
もし南森丘陵の現況地形が人為的なものとして、丘陵の自然形状を大きく変えた原因が館跡だけでなく古墳の築造が影響しているとするれば、館跡による地形改変とは異なる古墳特有の設計の痕跡、各部位の長さや寸法比等に一定の規格性や他の古墳との類似性が見られる可能性がある。南森丘陵が古墳であるかどうか判断する過程の一つとして他の古墳との類似性について検討し、課題や問題点を整理しておくことはその性格を検証するうえで有用であると思われる。そこで地形図並びに前方後円墳として墳形を推定した推定図を使い、他の古墳との比較検討を試みたい。前方部端を道路南側までとした案を推定案 A（全長約 161m）、道路北側までとした案を推定案 B（全長約 165 ～ 168 m）、墳丘を基壇状の整地帯が囲む場合の案を推定案 C（整地帯裾までを全長とすれば約 168 m、整地帯上を墳丘とすれば約 150m）とし、推定案 A を元に後円部が変形した古墳とした案を推定案 D とした。



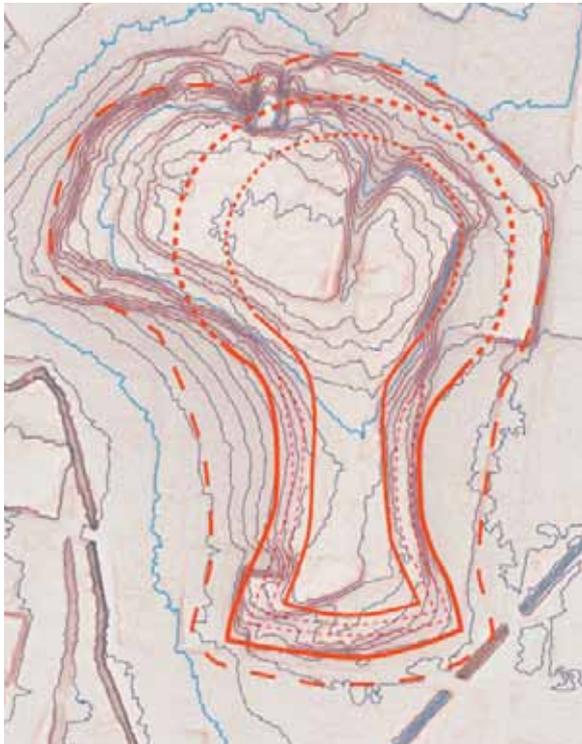
第 12 図 地形図 (1mコンタ) S=1/2000



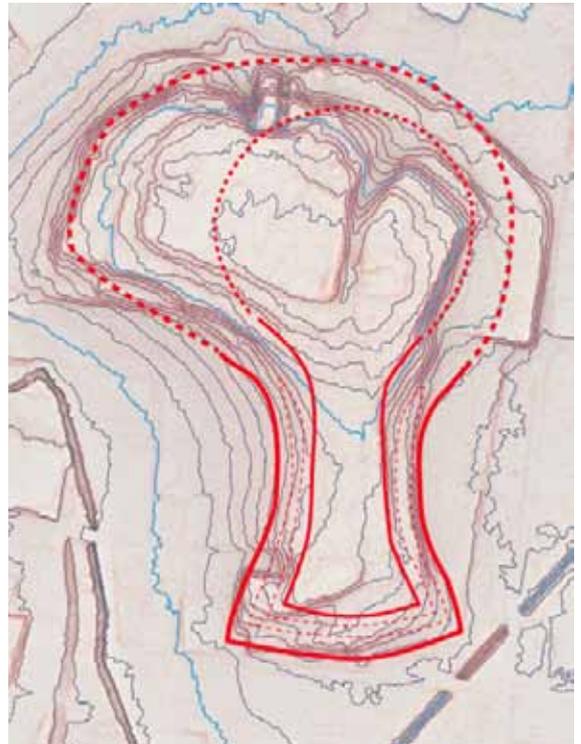
推定案 A



推定案 B



推定案 C



推定案 D

2 墳丘に関する比較検討

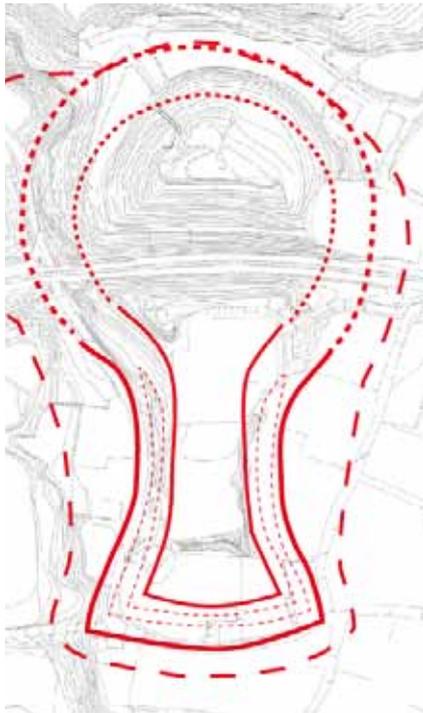
県内の従来の研究では後円部径の6分の1を基準に各部位の比較を行う手法を用いた例が多いことから、同様の手法で推定案Aを数比化した場合は、後円部と前方部の比は後円部6に対して前方部は概ね4.4～4.7となる。これは、天神森古墳、遠見塚古墳、雷神山古墳、五塚原古墳等の比率に類似する。古墳の墳丘についてさらに踏み込んで分析し、規格性を導き出しその設計について検討していく方法もあるが、南森丘陵のように改変された地形から規格性を導き出すことには慎重さが求められることから今回は他の古墳の地形図との重ね合わせによって類似性の検討を行うにとどめる。

比較対象は、県内の主要古墳と箸墓古墳（奈良県）、椿井大塚山古墳（京都府）、浦間茶臼山古墳（岡山県）、五塚原古墳（京都府）、西殿塚古墳（奈良県）、千塚山古墳（宮城県）、遠見塚古墳（宮城県）、杵ヶ森古墳（福島県）、会津大塚山古墳（福島県）等で、南森古墳の後円部と各古墳の後円部が同じ大きさになるように拡大・縮小し、重ねあわせて比較を行った。墳丘推定案A案及び地形図での主な古墳との比較図が第14、15図である。椿井大塚山古墳は改変が著しいが前方部墳麓やくびれ部付近のライン等で類似性がみられ、前方部墳頂幅も現況では概ね一致している。前方部両側に整地帯らしきものがある点も似ている。箸墓古墳との比較では、前方部墳頂側辺肩のラインに類似性がみられる。前方部墳麓線のラインは南森古墳がやや狭い。後円部段築1段目の肩の推定ラインには類似性がある。後円部に対するくびれ部幅は一致がみられる。浦間茶臼山古墳では、前方部側辺のラインの形状が類似する。後円部に対する前方部長の比も類似すると思われる。五塚原古墳との比較では、前方部の墳麓線の形状、肩のラインはほぼ類似している。前方部端の墳頂部の部分的な高まりは五塚原古墳の方がやや後円部側に寄っている。後円部に対する前方部長の比は概ね一致がみられる。千塚山古墳では、後円部に対する前方部長の比が概ね一致し、左半の墳麓ラインから前方部にかけての墳麓ラインに類似性がみられるが、現状では千塚山古墳は前方部墳頂幅が南森古墳に比べて細い。隣接する稲荷森古墳では、前方部の幅と形状には南森古墳に近いものがあるが、前方部の長さは、後円部径を同一にした場合は南森古墳の3/4程度で、実長では約1/2となっている。前方部端部墳頂に部分的な高まりがある点は類似し、後円部段築1段目の墳麓線と肩までの斜面幅にも類似性がみられる。また、稲荷森古墳の全長と南森古墳の後円部直径が近似することは二つの古墳の関連性を想起させる。会津大塚山古墳との比較からは、南森古墳の後円部東側は旧地形を生かし、後円部を大きく見せるように意図した可能性はないのかとも考えさせられる。

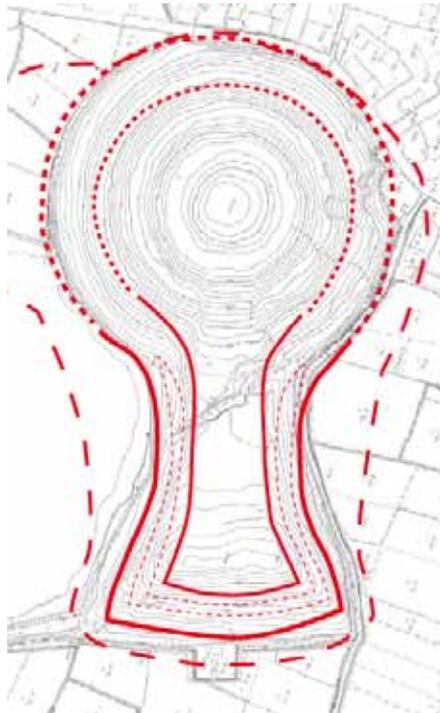
単位：m

古墳名	主軸長	後円径 後方部長	後円半径	後円(方)高	前方長	前方幅	前方高	後円部：前方 部比	後円部高の比		前方部高の比
									対全長	対後円部径	対前方部長
南森丘陵	161～165	92として	46	現7(+削平4)	73として	60～70	4	6:4.4～4.7	現4.2(6.7)	現7.6(12)	5.5
稲荷森古墳	96	62	31	9.6	34	32	4.5	6:3	10.0	15.5	13.2
天神森古墳(前方後方墳)	75.58	43.08	21.54	4.26	32.5	32	3.04	6:4.5	5.6	9.9	9.4
成島1号墳	58.7	32.5	16.25	5.1	26.2	22.4	3.65	6:5	8.7	15.7	13.9
戸塚山139号墳	54	36	18	4.5	18	27	4.2	6:3	8.3	12.5	23.3
京塚1号墳	40.1	20.7	10.35	3.5	19.4	15	5	6:6	8.7	16.9	25.8
下小松古墳群第65号墳	23.3	14.5	7.25	2.1	8.8	8.8	1.2	6:3.6	9.0	14.5	13.6
会津大塚山古墳	114	約70	35	13	55	50	6	6:5	11.4	18.6	10.9
名取雷神山古墳	168	96	48	12	72	96	6	6:4.5	7.1	12.5	8.3
遠見塚古墳	110	63	31.5	6.5	47	37	2.5	6:4.5	5.9	10.3	5.3
亀ヶ森古墳	127.3	66.8	33.4	8	60.5	60	6	6:5.4	6.3	12.0	9.9
椿井大塚山古墳	175	110	55	20	80	-	10	6:4.3	11.4	18.2	12.5
五塚原古墳	91.2	54	27	8.7	40	-	2.1～4	6:4.4	9.5	16.1	5.3

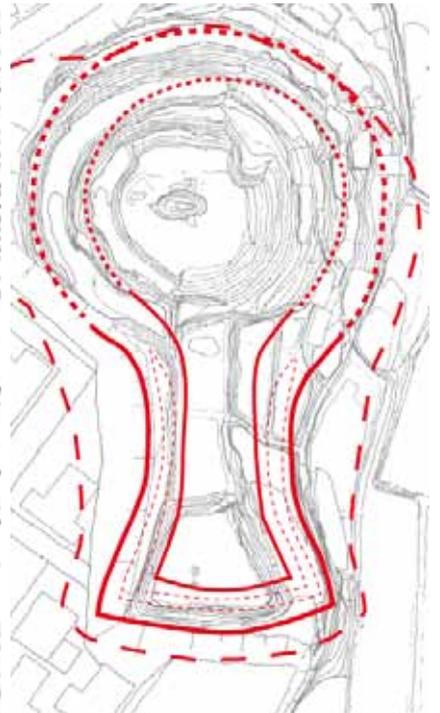
表1 南森丘陵と主要古墳一覧



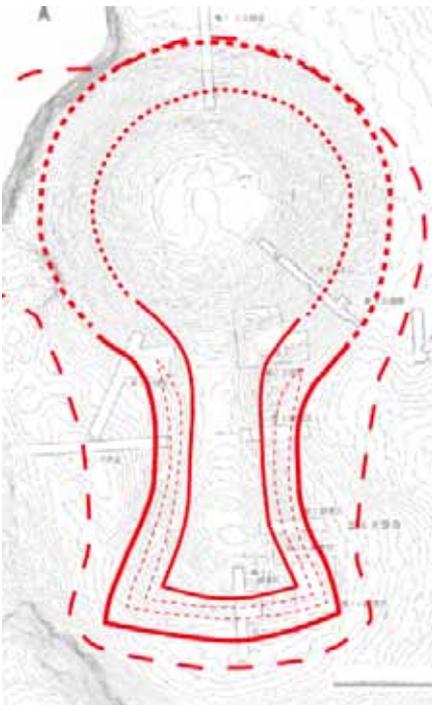
南森古墳と椿井大塚山古墳



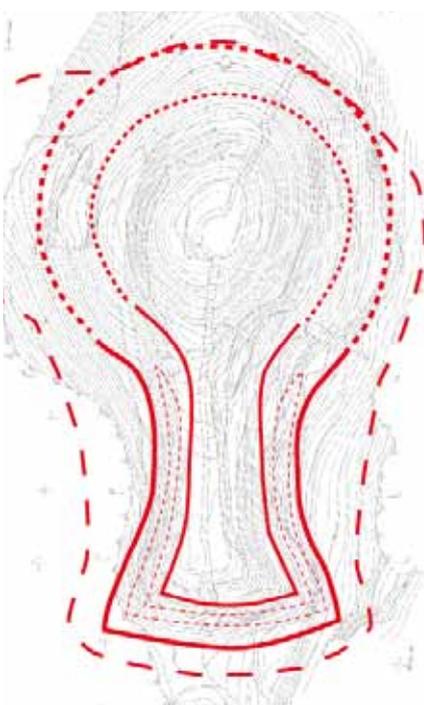
南森古墳と箸墓古墳



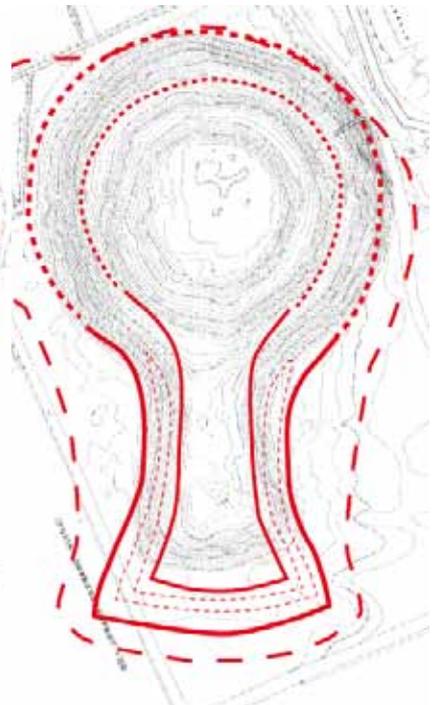
南森古墳と浦間茶臼山古墳



南森古墳と五塚原古墳



南森古墳と千塚山古墳



南森古墳と稲荷森古墳

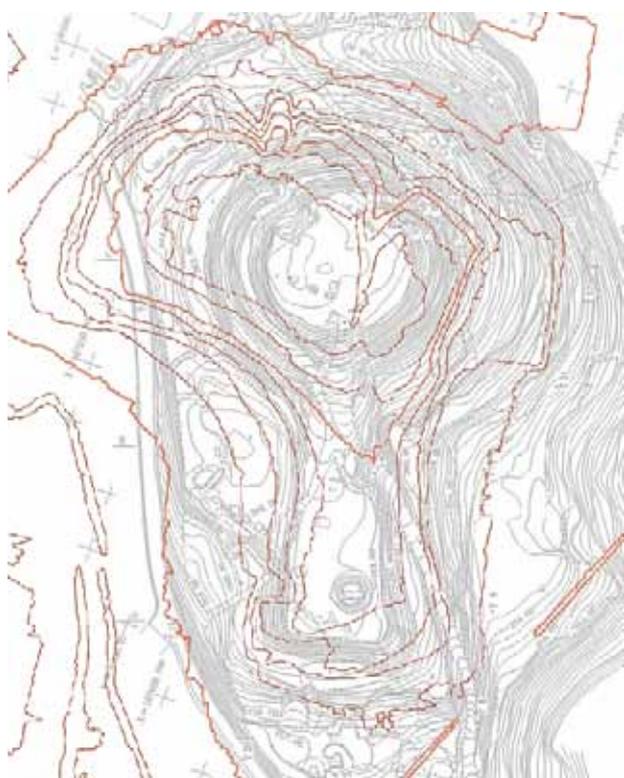
第 14 図 南森古墳推定図との比較図（南森古墳のみ S= 1/2000）



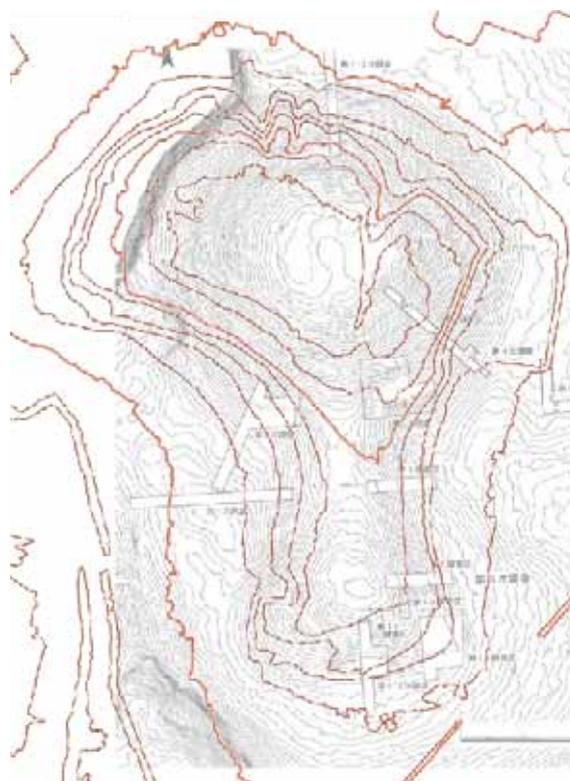
南森古墳と樅井大塚山古墳



南森古墳と浦間茶臼山古墳



南森古墳と会津大塚山古墳



南森古墳と五塚原古墳

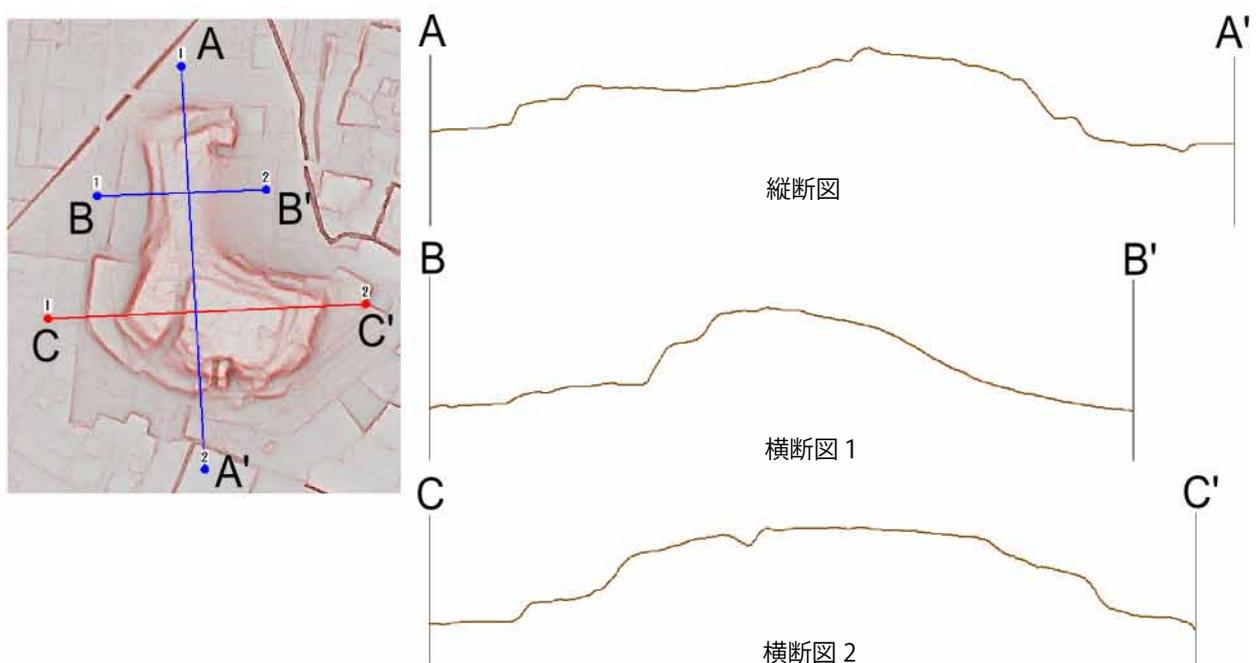
第 15 図 南森丘陵地形図との比較図 (南森丘陵のみ S= 1/2000)

次に、立面でも比較を試みる（表1）。全長や後円部長に対する後円部墳頂の高さの数値比を比べた場合は、現況では南森丘陵の低さが際立つ。仮に稲荷森古墳と同様の比で段築2、3段目があつたと仮定した高さで比べると、その比は遠見塚古墳、雷神山古墳、亀ヶ森古墳に近い。さらに前方部長に対する前方部墳頂の高さの比では、遠見塚古墳や五塚原古墳に近似している。南森丘陵は丘陵長に比べ低平な印象を受けるが、類似する墳丘を持つ古墳はあると言えるのではないだろうか。また南森古墳の断面図で見ると前方部墳頂から後円部へかけ緩やかにスロープ状に高まる特徴がみられる（第16図）。

これらの比較からは推定される南森古墳と上記の古墳の形状には概ね類似性があると言えるのではないだろうか。全長や後円部長に対する前方部長の比率、くびれ部の幅や墳頂平坦面の幅等が類似する古墳が見られ、前方部の平面形状の類似は単なる偶然とは思われず、南森丘陵にはこれら古墳に類似する規格性がある可能性は高いと思われる。問題となる後円部東側の張り出しであるが、西殿塚古墳や会津大塚山古墳のように一方向からの正面観を意識したような古墳も存在することから、単に後円部を崩しただけではない可能性も考えておく必要がある。古墳の比較からは、現況では後円部と推定される南森丘陵南半が東側に張り出し、円形になっていないものの、墳丘全体からみれば意外にその張り出し幅は大きくないという印象を受ける。

南森丘陵にはIV-1-(4)の前段で掲げた9つの事項に加え、前述したように古墳に類似する規格性がある可能性を指摘することができる。総じて見た場合に、南森丘陵が古墳である可能性を示唆しているのではないかと思われる。

また、これら検討により、今後の改変状況の調査や形状・性格把握のための調査にあつての課題も明らかとなった。前方部については、その広がり方について改変がどう作用しているかが課題となる。前方部前端付近の墳頂の高まりの位置もやや北端に限られており、元々部分的な高まりがあるのか、削平で北側のみ残存したのか等の調査も必要であろう。



第16図 南森丘陵の縦横断面図（※高さ3倍処理）

3 まとめ

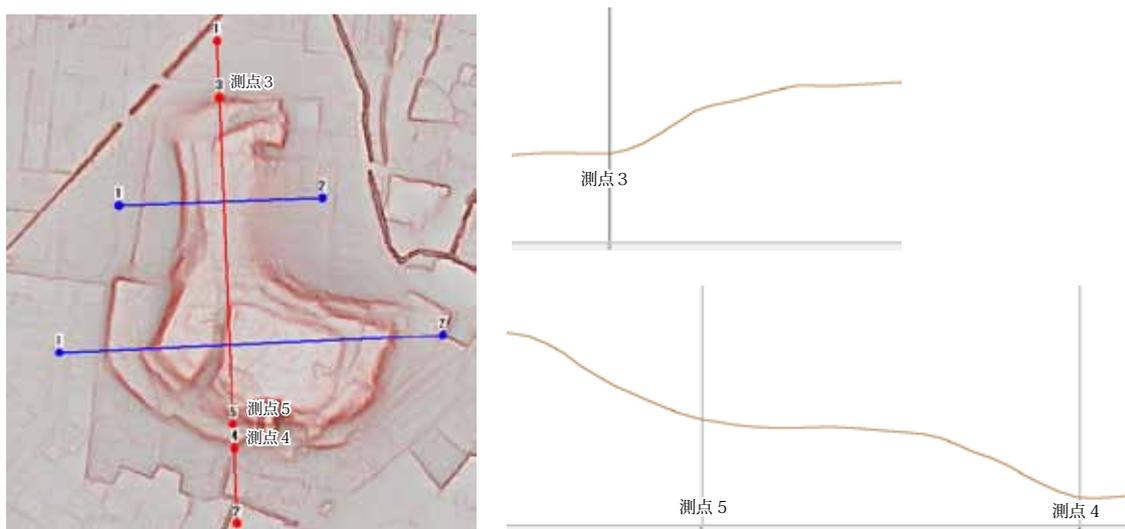
発掘調査による検証が未実施ではあるが、南森丘陵は前方後円墳である可能性があると考えられる。古墳である場合は、その全長は約 161 m (150 ~ 168 m) と推定され、その大きさは東北最大の古墳である雷神山古墳に次ぎ、東日本でも有数の大型前方後円墳となる。東北地方の歴史を考えるうえでその意義は極めて大きい。現況では改変が進み、古墳と判断するには慎重さを要するものの、近年の宅地開発は既に南森丘陵の山裾にまで及んでおり、古墳であることが確認されてからの公表・保護計画の立案では遅きに失する可能性が生じてきているのが現状である。

もし南森丘陵が前述のような古墳であるとすれば、大型前方後円墳の日本海側最北の地とされ、いわゆる蝦夷との境界線に位置する米沢盆地にどうしてこのような古墳が現れてくるのか、その背景が大きな問題となろう。南森古墳の存在は古墳時代にヤマト政権の影響が当地域にどのように及んでいたのかに留まらず、ヤマト政権の豪族連合の姿を考えるうえでも重要になってくるだろうと思われ、まさに全国的な視野からの論議が必要となる古墳である。

しかしながら、古墳推定地として初めて正式な報告を行う段階であることを考えると、古墳と仮定した場合の地域的背景について若干整理する程度が限界であろうと思われる。

そのため、地域的に南森古墳と関連性が高いと思われる稲荷森古墳や蒲生田山古墳群との関係を整理・検討し、南森古墳の築造年代や背景について考えておきたい。

南森古墳は米沢盆地の北部に位置する。米沢盆地では、方墳や前方後方墳が早い段階に現れ、古墳時代前期中葉以降に大型の古墳が築かれていく。その動向は、東北地方南部の古墳時代前期の流れと概ね相違は無いものと考えられる。市内では、5世紀前半や6世紀後半の古墳や集落遺跡がはっきりしないが、奈良時代には山形県内でも米沢盆地は早くから律令制に組み込まれている。あるいはその素地として古墳時代からヤマト政権と強い関係を持った北辺の地として重要視されていた可能性も考えられる。



測点	位置	累計距離	測点座標 (10系)		推定全長 (m) ※測点3からの距離
			東西	南北	
1	基準点	0.00	-59293.333	-217550.417	
3	前方部端	25.85	-59292.263	-217576.247	
5	後円部端1	176.03	-59286.046	-217726.297	150.18
4	後円部端2	187.08	-59285.589	-217737.338	161.23

第 17 図 南森古墳全長に係る測量データ

地域での位置づけを考えるうえで南森古墳の築造年代は重要な検討事項の一つである。南森古墳築造前の旧丘陵に掘り込まれた3世紀末とみられる竪穴住居跡が見つかったことから、竪穴住居が廃絶した後に築造が開始されたとすれば、これが南森古墳の築造年代の上限を示すこととなる。

南森古墳から採取された二重口縁土師器は、口縁部1段目の口唇部が強く外へ張り出し、蒲生田山4号墳の二重口縁底部穿孔壺に類似することなどから、古墳時代前期と考えられる。また、前方部の形状からは古墳時代前期でも古い特徴を有するとみられる。一方、東北地方の古墳は4世紀後半に大型化する傾向がみられる。これらから南森古墳の築造年代は古墳時代前期に収まると考えられる。平面形態が類似する古墳は概ね4世紀中葉以前の築造年代が想定されている。その点は課題であるが、現段階での当地域における古墳出現時期や古墳編年等から南森古墳の築造時期を4世紀後葉以前と仮定し検討を進める。

南森古墳の築造年代を考えるうえでは隣接する稲荷森古墳との関係は重要となる。その立地と位置関係からすれば、南森古墳と稲荷森古墳は同一首長の系譜と考えるのが妥当と思われる。4世紀代の古墳の大型化の傾向から、規模からすれば築造順は稲荷森古墳が南森古墳に先立つと推定される。稲荷森古墳は4世紀後葉の築造と考えられているが、南森古墳の築造時期を前述の時期と考えれば、稲荷森古墳の築造時期についても再検討が必要となる。特に築造時期に関わる稲荷森古墳の出土土器は、これまでも様々な考えが示されていることから、ここで改めて整理、検討しておく。

稲荷森古墳の築造年代は、墳丘の形状と築造方法、後円部墳麓出土の底部穿孔土器によっている。さらには古墳築造前の旧丘陵に存在した竪穴住居跡から出土した塩釜式の高坏(4世紀前半)が築造年代の上限とされている。この古墳の出土遺物で問題とされるのは底部穿孔土器の器形である。器種は壺とみられるが、土器の上半とみられる破片には、三重の刻み目のある隆帯が廻っている。調査者はこれを壺肩部の隆帯と想定し、「三段の隆帯上の横走る縦位列刻文」とその特徴を述べている。このような刻み目のある隆帯を有する土器は弥生土器に見られ、4世紀後葉の在地の土器では類例が確認されていない。そのため後から別の弥生土器が紛れ込んだとし、別個体とみる向きもあった。その一方、中村五郎氏は実見のうえ十王台式系の土器であるという意見を呈されている。十王台式土器は弥生時代後期の北関東系の弥生土器である。これを受け、この土器を弥生時代の十王台式土器とし、古墳祭祀に伝製品を用いたという説も提唱されている。

今回、稲荷森古墳発掘調査時の底部穿孔土器の出土記録を丹念に再検討した。底部穿孔土器は後円部の墳麓線に対し概ね横位で出土している。壺がどのように割れば各破片の出土位置と齟齬をきたさないか検討し、壺が割れた際にほぼ原位置に近いと思われる地山面に張り付いた破片と、その他のいわば浮いた状態の破片に分け、飛散状態を確認、検討した。その結果、全体の出土状況からすれば、穿孔のある底部と隆帯のある破片を同一個体と考えることに違和感はなく、よって別個体とする説には同意しがたいこと。また、胎土や色調からすれば古墳時代の土師器であると言え、底部の穿孔もおそらく焼成前穿孔と思われることから弥生土器の伝製品とは考えにくく、古墳時代の底部穿孔土器という従来の調査報告に変更は無いものとする。問題は隆帯が肩部側か口縁側かという点である。

隆帯のある破片は、隆帯を下方(地山側)に向けて出土したもの3点(A群とする。)と上方に向けて出土したもの2点(B群とする。)に分かれる。頸部を壺の底側に向けた

破片はA群で1点とB群で1点、頸部を壺の横方向に向けた破片がA群で2点である。

地山面に接する破片は破壊時の原位置に近いと判断される。破片が地山面に接しておらず、他の部位の破片の最も上に重なって出土したA群の2点は、頸部を壺の横方向に互い違いに向ける状況からも二次的な移動があったものと思われ器形検討から除く。

地山面に接する出土状況にある隆帯のある破片はA群1点、B群2点となる。特にA群の1点は壺の原位置に近い可能性があると考えられ、頸部を底部に向け、壺の全体での位置は中央より上部である。B群の2点は、頸部を底部に向け、出土位置は壺の最上部にあたる。これらから隆帯のある破片は壺の器形の上部に多く、いずれも頸部を底方向に向けているという特徴を見出せる。壺の上端から出土したB群の2点は地面に接しない側の破片が落下した状態と考えるのが妥当ではないかと考える。

以上から、隆帯のある破片の部位は壺の頸部よりも上部、口縁部側に位置する可能性が考えられ、これは十王台式土器にもみられる特徴である。稲荷森古墳の底部穿孔土器は十王台式土器の影響を残す土器の可能性はあると言えそうである。もし十王台式土器の影響を受けた供献土器だとすれば他に類例が無く非常に特異であるが、関東系の土器は市内の蒲生田山4号墳でも出土しており、稲荷森古墳は旧丘陵面で検出された竪穴住居の廃絶からさほど時間を置かず築造されている可能性も考えられる。いずれにしても隆帯を有するという古い要素からは、稲荷森古墳の築造時期が現在考えられている時期より遡る可能性は十分にあると考える。

さらに墳丘形状に関しては、後円部に比して短い特徴的な前方部を有する。築造方法は岬状に突き出た丘陵を削って1段目を造成している。後円部では段築の2段目、3段目に比べ1段目が高く外見上の特徴となっている。また、後円部径：前方部長＝2：1と前方部が短いことや、前方部幅が狭く前方部端にむかってやや広がる傾向を古い特徴とすれば、土器及び墳形から、稲荷森古墳の築造時期が4世紀中葉にまで遡り、後続して南森古墳が築かれた可能性を考えることもできるのではないだろうか。

南森古墳から北へ約3.3kmに位置する蒲生田山古墳群は、平成2年に開発に伴う発掘調査が実施された。尾根上に次々と3基の古墳が築造されており、おそらく同一集団の首長の系譜と考えられる。最高所に前方後方墳の3号墳、次も前方後方墳の4号墳、一番下方に前方後円墳の2号墳（現状保存、未発掘）が位置する。2代続けて前方後方墳を採用した首長の系譜が3代目で前方後円墳を採用したと考えられ、何らかの政治的背景の変化があったと思われる。このうち蒲生田山2号墳は稲荷森古墳と同時期かやや早い段階と考えられている。最高所に位置する3号墳が前方部を南に向けるのに対し、4号墳と2号墳は前方部を北側（3号墳側）に向ける。その配置には、地形的理由だけではなく何らかの理由や意図が働いていたとも考えられ、互いに向き合うような配置は、稲荷森古墳と南森古墳にも見られる。

市内における古墳時代の集落遺跡が明らかでないことから在地勢力の実態は良くわかっていないが、蒲生田山古墳と稲荷森古墳、南森古墳はともに吉野川流域に位置していることから互いに密接な関係にあったと推測される。市内における弥生～古墳時代の河間低地にある遺跡は埋没深度が深い傾向にあり未確認の遺跡はまだ相当数あると考えられる。

稲荷森古墳はかつては単独墳と考えられていたが、隣接する長岡山丘陵上に古墳又は周溝墓群があったことが明らかとなっている。遺跡名は長岡山古墳群で、広い意味では稲荷

森古墳や南森古墳も含まれる。平成10年に発掘調査が実施され、方形周溝墓4基と主体部（SH53）1基が確認され、発見後の開発調整の末に現状保存となった。長岡山の尾根の大部分は昭和初期に完全に削平されており、消滅した古墳は少なくないと思われる。SH53はこれに伴う周溝が不明瞭で無墳丘墓の可能性も指摘されており、副葬品の鉄器から4世紀前葉～中葉の遺構と考えられている。主体部は長さ2.3mと小規模で、現状保存が決まったことから調査も部分的に過ぎなかったにも関わらず、6種10点以上の鉄製品を出土した。これは米沢盆地の他の古墳と比べても特に多い。当地域への鉄の搬入が少なくなかったことを示し、長岡山古墳群を営んだ在地勢力の力の大きさを示唆していると言えよう。

4 遺跡の保護と今後の調査について

南森丘陵の調査がなかなか実施に至らず、公表が遅れたことは否めない事実である。簡易な地形図すら無い状況の中、丘陵の改変が著しく、外見上ただちに古墳とは判断することが難しいことに加え、東北最大級の規模等から古墳推定地としての発表には特に慎重な姿勢が求められた。そのことがかえって南森丘陵の調査着手や公表を遅らせた一因になってしまったことは、遺跡保護の観点からも反省すべき点であろう。今でも慎重な姿勢が必要であることは変わらず、批判的な視点も持ちつつ客観的に醒めた目でひとつひとつ事実を見ていく姿勢が求められる。行政的には遺跡の性格を明らかにしその保護を行う責務がある。今回の報告を通じ、広く関係各位のご意見をお聞きし、様々な課題については今後も発掘調査等を通じて解明していく必要がある。以下に今後実施すべき調査における主たる課題を書き留めておく。

- ①丘陵南半部東側の張り出し部の成因とその他の改変状況
- ②丘陵長（墳長）
- ③丘陵北半部の北端部の位置と形状及び広がり方の状況、北端部頂の高まりの成因
- ④丘陵北半部の東緩斜面の改変状況
- ⑤丘陵北半部の西斜面のテラス帯及び丘陵裾の残存状況
- ⑥丘陵を巡る低地及び整地帯
- ⑦丘陵の地山整形状況や盛土の状況
- ⑧これまで勾玉や鉄製品が表採されている丘陵南半部頂の面的調査
- ⑨丘陵南半部西側切土面の竪穴住居の記録
- ⑩外表施設の有無や古墳祭祀に関連する遺物の有無
- ⑪前方部段築1段目のテラスが後円部に接する地点の形状

南森丘陵は、民地であり複数の地権者の方がおられる。また神社が2箇所と古い墓地があるなど、調査を行うためには事前に丁寧な調整が必要であり、地元の長岡地区や地権者の方々のご協力やご理解は欠かすことができない。小さな自治体の調査体制ではできることには自ずと限度があるが、遺跡の保護と地域の歴史解明のためにできることから一步一步前進させていく必要がある。

(参考) 南森館跡

南森古墳の改変状況を考えるうえでは、館跡による地形改変が最も大きいと思われる。以下に参考として、市分布調査報告書第15集から一部抜粋し掲載する。

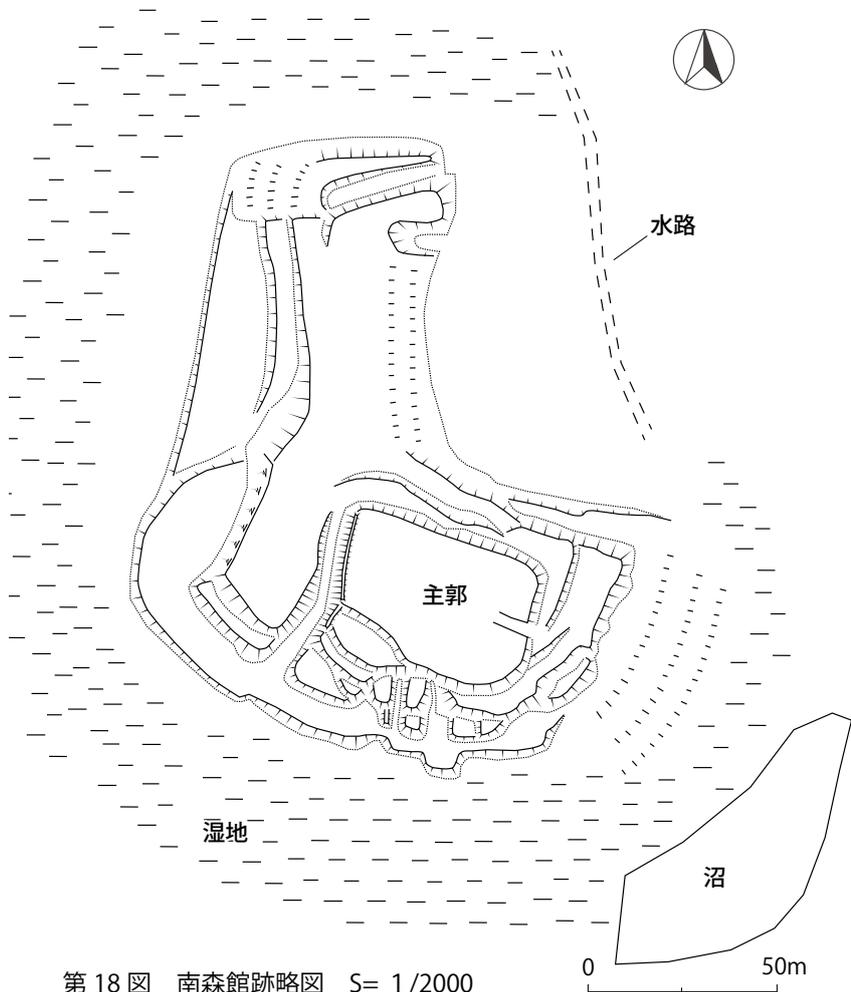
「南森館跡は、市内平野部に所在する館遺構としては残存状況が比較的良く、今次測量調査でも、南森丘陵南半部のやや東よりにおかれた主郭を中心とし、主郭を取り囲むように曲輪を配する形状を読み取ることができる(第18図)。館跡の中心となる主郭は東西方向に長い長方形を成し、西辺を堀切又は堀底道で区切る。主郭西端にはわずかに土塁が残る。主郭西方と主郭内には八幡神社と神明神社が祀られている。館の正面は南又は東方向と推測される。館跡の南側には二条の縦堀があるが館跡に伴うものか後世の改変であるかは不明である。この縦堀近くの山裾には平成3年頃まで井戸跡が存在していた。

館跡の南方斜面には近世の古墓地が立地する。万年塔型の墓石が多く、その内の1基には屋根部分に、「へ」型の屋根らしき陰刻とその下部に十字の刻印が見られる。

南森館周辺の中世遺跡を概観すると、南森館跡の南方には、内城館跡、鶺ノ木館跡がある。内城館跡の西隣には卯之木浦^{うのきうら}という小字名も残り、内城は本来ウノキと読むのではないかと思われる。また地区名の俎柳^{まないたやなぎ}も末尾はギである。城を「キ」と発音するとすれば、周囲を囲う柵の意味を考慮しておく必要がある。中世館跡以外に、中世以前の祭祀遺跡や豪族居館、城柵等の存在も考えておく必要のある地域と言える。

また、中世の南森館跡周辺における土地売買の記録が残っており、天文年間の湯目文書に、伊達晴宗が湯目七郎左衛門に与えた土地として「中麿」という地名が出てくる。中麿は中麿郷、中丸、中丸郷とも記され、字限図では、字中丸は内城館北側にあたる(第3図)。中麿郷には、きつねさき在家、さい藤在家、みょうの在家等が含まれていたとされる。

きつねさきは、狐山の先又は狐崎という意味であるとするれば、おそらく稻荷森古墳付近と思われる。さい藤は、南森の西側に字名才藤(又は斎藤)が残る。みょう(名)は、享保の絵図に「みょう」と記される場所があり、南森丘陵の南々東約300mに位置し、現在の字名では熊ノ前となっている。南森一帯が中世において一つの郷を成している点は、この地域の歴史を考えるうえで留意すべき点である。」



引用・参考文献

- 佐藤鎮雄・佐藤庄一 1987 「南陽市史 考古資料編」南陽市市史編さん委員会
- 安村俊史 1987 「柏原市文化財概報 玉手山8号墳丘測量調査概報」柏原市教育委員会
- 金閣怨・佐原真 1987 「弥生文化の研究 弥生土器Ⅱ」雄山閣出版
- 小澤一雅 1988 「前方後円墳の数理」雄山閣出版
- 吉野一郎・茨木光裕 1988 「南陽市埋蔵文化財調査報告書第3集 稲荷森古墳」南陽市教育委員会
- 吉野一郎・茨木光裕 1989 「南陽市埋蔵文化財調査報告書第4集 稲荷森古墳」南陽市教育委員会
- 阿部朝衛 1989 「土師器からみた東北地方古墳成立期の様相」帝京史学第4号
- 佐藤鎮雄・佐藤庄一 1990 「南陽市史 上巻」南陽市市史編さん委員会
- 西野 元 1991 「筑波大学先史学・考古学研究調査報告5 古墳測量調査報告書Ⅰ」筑波大学歴史・人文系
- 千塚山古墳測量調査団 1992 「千塚山古墳測量調査報告書」村田町教育委員会
- 石野博信他 1992 「古墳時代の研究7」雄山閣出版
- 黒沢 浩 1993 「明治大学考古学博物館所蔵の十王台式土器」『明治大学考古博物館館報 NO8』明治大学
- 滝沢誠・日高慎 1994 「飯山市埋蔵文化財調査報告書第41集 勘助山古墳測量調査報告書」飯山市教育委員会
- 角田朋行 2001 「南陽市域の条里制及び古墳等について」『山形県地域史研究 26』山形県地域史研究協議会
- 佐藤鎮雄 2011 「やまがたの古墳時代一最上川流域のムラの古墳一」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 沼沢 豊 2011 「日本古墳の構造研究」早稲田大学
- 吉田江美子・山田 渚 2012 「蒲生田山古墳群・総合公園内遺跡群」『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集』南陽市教育委員会
- 山田 渚・吉田江美子 2013 「長岡山遺跡・長岡山東遺跡」『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集』南陽市教育委員会
- 角田朋行・吉田江美子 2014 「南陽市遺跡分布調査報告書（1）」南陽市教育委員会
- 角田朋行 2015 「南陽市遺跡分布調査報告書（2）」南陽市教育委員会
- 向日市教育委員会 2015 「五塚原古墳第7次調査 現地説明資料」向日市教育委員会
- 城倉正祥・青笹基史 2015 「千葉県栄町竜角寺50号墳のデジタル三次元測量・GPR調査」早稲田大学
- 吉田博行・渡部智子 2016 「亀ヶ森古墳Ⅳ」会津坂下町教育委員会
- 角田朋行 2017 「南陽市遺跡分布調査報告書（5）」南陽市教育委員会

写真図版





南森（西から、俎柳堤越しに撮影）



南森（西から、住宅地造成前）



南森空中写真（平成 26 年、市撮影）



冬の南森（西北から）



南森と稲荷森古墳（南西から）



南森と稲荷森古墳（西から、右：南森 左：稲荷森古墳）



稲荷森古墳後円部から南森を撮影



(推定)前方部前端(西から)



(推定) 前方部西側と整地帯 (南西から)



(推定) 前方部墳頂 (南から)



(推定) 前方部東側 (旧葡萄園地、東から)



(推定) 前方部の前端部墳頂 (北から)



(推定) くびれ部東側 (西北から、前方部東斜面から)



(推定) くびれ部西側～切土された後円部 (西北から)



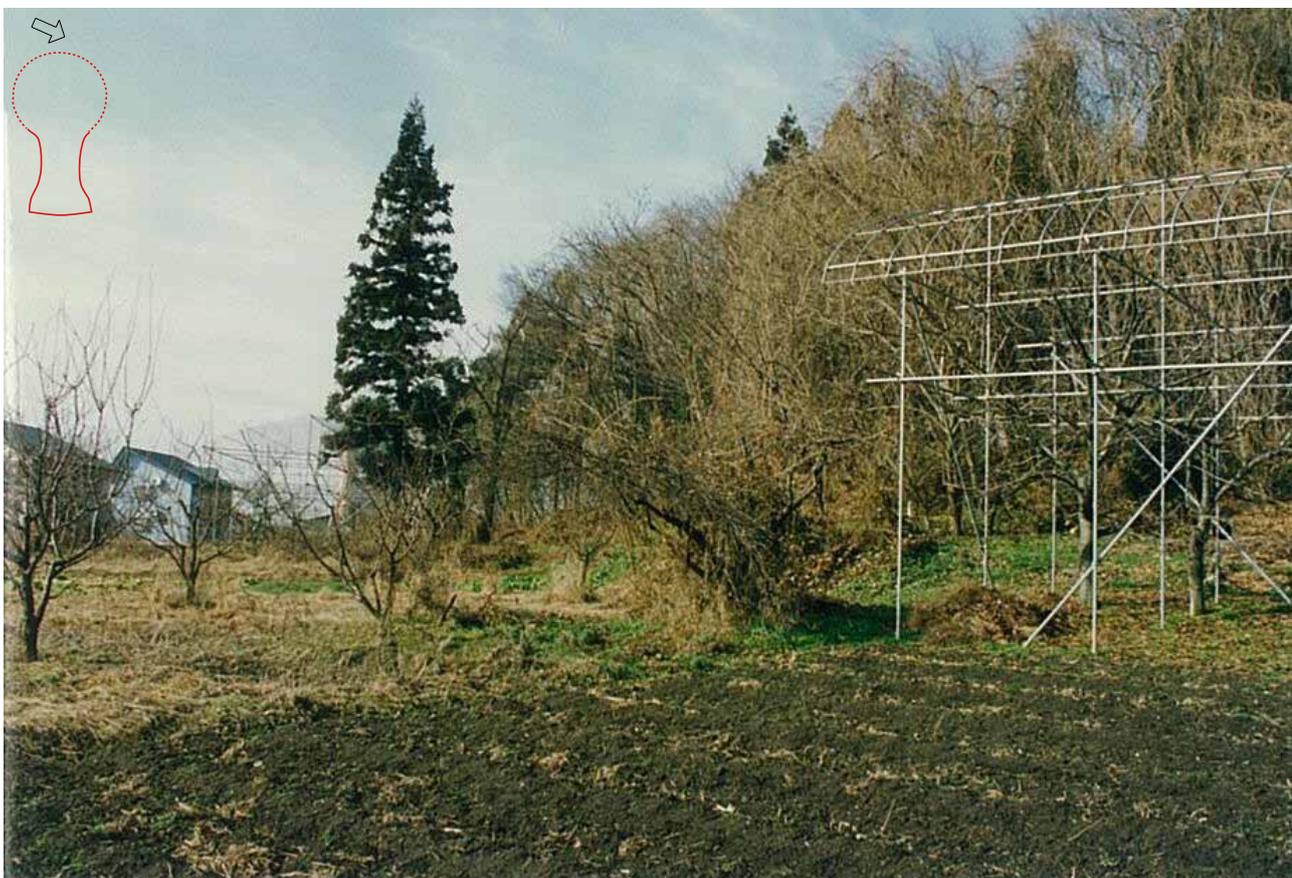
(推定) 後円部西側 (西南から)



(推定) 後円部南側及び低地 (西から)



(推定) 後円部南側及び低地 (西から)



(推定) 後円部南側 (東から)



(推定) 後円部南東側及び低地 (南から)



(推定) 後円部東側張出部 (北から)



(推定) 後円部切土斜面の竪穴住居跡 (写真中央の暗褐色土の範囲、西から)



昭和 20 年代の南森



丘陵南半部南側の古墓地
(北から)



十字刻印のある万年塔型墓



館跡 (堀切と土塁、北から)

報告書抄録

ふりがな	みなみもりそくりょうちようさほうこくしょ (こふんすいていちにかんするちようさ)							
書名	南森測量調査報告書 (古墳推定地に関する調査)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	南陽市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	角田朋行							
編集機関	南陽市教育委員会							
所在地	〒999-2292 山形県南陽市三間通436番地1 TEL 0238-40-3211							
発行年月日	2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかみなみもりいせき 長岡南森遺跡 (みなみもりこふんすいていち 南森古墳推定地)	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 ながおか 長岡	6213	052	38° 02' 13"	140° 9' 28"	20160926 } 20170328	40,000㎡	遺跡分布 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
ながおかみなみもりいせき 長岡南森遺跡 (みなみもりこふんすいていち 南森古墳推定地)	散布地	縄文～平安時代		(古墳) 城館址	土師器	大型前方後円墳推定地の測量 調査、赤色立体地図作成。 古墳推定地の現状が明らかにな った。館跡を確認した。		
要約	<p>旧吉野川・上無川・織機川によって形成された複合扇状地に形成された南陽市には縄文・弥生・古墳・奈良～平安・中世・近世と遺跡が存在する。市内には古墳時代前期の蒲生田山古墳群を始め多くの古墳が存在し、長岡地区には国指定史跡の全長96mの前方後円墳である稲荷森古墳が存在する。その稲荷森古墳から南東へわずか130mに位置する独立丘陵である南森は前方後円墳ではないと言われていたが、館跡等によって改変が加えられており、形状から直ちに古墳と判断できないことや、規模や墳形から慎重さが求められ、その結果これまで調査が及んでこなかった。近年開発が丘陵周辺に及び始めており、平成28年度に遺跡の性格を確かめ、保護を行う目的で基礎資料となる測量調査を実施した。形状を観察できる赤色立体地図の作成に主眼を置いて調査し、南森丘陵の現況の姿が明らかとなった。その平面形態や各部位の数値比には古墳との類似点が認められた。古墳推定地である南森が大型前方後円墳であれば全長160m以上で、前方部の形状は古い様相を示す。「南森古墳」の検証は今後の発掘調査等を待つ必要があるが、古墳推定地として今後調査・研究を進めるうえで基本的な資料を得られた。</p>							

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 16 集
南森測量調査報告書
(古墳推定地に関する調査)

2017 年 3 月 3 1 日

発行 南陽市教育委員会
〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地の 1
電話 0238-40-3211 (代)

印刷 会社 南陽印刷株式会社
〒 999-2231 山形県南陽市二色根 5 - 1 1
電話 0238-43-3028

